

読書悠々日記

(2013年)

久恒啓一

目次

2013年1月	5
緒方貞子「私の仕事」(草思社)	5
朴槿恵「絶望は私を鍛え、希望は私を動かす【朴槿恵自叙伝】」(晩聲社)	7
リー・クアンユー「リー・クアンユー回顧録」(下巻)(日本経済新聞社)	8
大前研一「クオリティ国家という戦略」(小学館)	10
浜田宏一「アメリカは日本経済の復活を知っている」(講談社)	11
2013年2月	11
帯木蓬生「日御子」(講談社)	11
朝井リョウ「何者」(新潮社)	11
田村慶子「頭脳国家・シンガポール」(講談社)	12
田村慶子「シンガポールを知るための62章」(明石書店)	12
山本紀夫「梅棹忠夫一知の探検家の思想と生涯」(中央公論新社)	13
津村節子「夫婦の散歩道」(河出書房新社)	14
岩見隆夫「昭和の妖怪 岸信介」(中公文庫)	14
2013年3月	15
キケロー「老年について」(岩波文庫)	15
市井三郎「歴史の進歩とは何か」(岩波新書)	16
ハインリヒシュリーマン「古代への情熱—シュリーマン自伝」(岩波書店)	16
福沢諭吉「現代語訳 文明論之概略」(ちくま文庫)	18
嘉納治五郎「嘉納治五郎—私の生涯と柔道」(日本図書センター)	20
倉田百三「親鸞」(角川文庫)	21
2013年4月	22
山崎光夫「開花の人—福原有信の資生堂物語」(東洋経済新報社)	22
城山三郎「部長の大晩年」(新潮社)	22
佐高信「孤高を恐れず—石橋湛山の志」(講談社文庫)	24
吉村昭「冬の鷹」(新潮新書)	25
城山三郎「無所属の時間で生きる」(新潮文庫)	26
2013年5月	26
吉村昭「ポーツマスの旗—外相・小村寿太郎」(新潮文庫)	26
ティモシー・ライバック「ヒトラーの秘密図書館」(赤根洋子訳・文芸春秋)	27
佐藤剛「上を向いて歩こう」(岩波書店)	27
孫崎享「戦後史の正体」(創元社)	27
松本重治「上海時代—ジャーナリストの回想(上)」(中央公論社)	28
玉村豊男「晴耕雨読ときどきワイン」(中央公論新社)「隠居志願」(東京書籍)「今日よりよ	

い明日はない」(集英社)「作家の胃袋」(祥伝社)	29
田中正明「パール判事の日本無罪論」(小学館)	30
山口由美「箱根富士屋ホテル物語」(千早書房)	32
小出進「世界救世教 岡田茂吉 企画行動力の秘密」(講談社)	33
宮本常一「忘れられた日本人」(岩波書店)	34
永井荷風著・磯田光一編「摘録 断腸亭日乗」(上)(岩波書店)	35
2013年6月	37
ビクター・マイヤー＝シヨンベルガー,ケネス・クキエ,斎藤栄一郎「ビッグデータの正体」(講談社)	37
佐野真一「旅する巨人 宮本常一と渋沢敬三」(文藝春秋)	37
丹羽宇一郎「北京烈日」(文藝春秋)	39
林真理子「林真理子の名作読本」(文藝春秋)	40
百田尚樹「夢を売る男」(太田出版)	41
イケダハヤト「旗を立てて生きる」(晶文社)	42
寺島実郎「何のために働くのかー自分を創る生き方」(文藝春秋)	43
佐高信「友好の井戸を掘った人たち」(岩波書店)	44
2013年7月	45
寺田一清「森信三 一日一語」(致知出版社)	45
北康利「西郷隆盛 命もいらず名もいらず」(WAC)	46
岡崎武志「蔵書の苦しみ」(光文社)	47
堀辰雄「風立ちぬ」(Kindle版)	47
2013年8月	47
常見陽平「自由な働き方をつくる「食えるノマド」の仕事術」(日本実業出版社)	47
安藤美冬「冒険に出よう 未熟でも未完成でも“今の自分”で突き進む。U25 Survival Manual Series」(ディスカヴァー・トゥエンティワン)	47
石光真人「ある明治人の記録 会津人柴五郎の遺書」(中公新書)	47
色川大吉「ある昭和史」(中央公論社)	48
曾野綾子「人間にとって成熟とは何か」(幻冬舎新書)	50
新人物往来社「日本史有名人の晩年」(新人物往来社)	51
高野悦子「岩波ホールとく映画の仲間>」(岩波書店)	51
百田尚樹「幸福な生活」(祥伝社)	54
百田尚樹「海賊と呼ばれた男」(上下巻)(講談社)	54
中村英利子「漱石と松山」(アトラス出版)	56
伊丹十三「女たちよ!」(新潮社)	56
2013年9月	56
橋本大也「データサイエンティスト データ分析で会社を動かす知的仕事人」(ソフトバンク新	

書)	56
和田茂樹「漱石・子規 往復書簡集」(岩波文庫)	58
鷲田清一・内田樹「大人のいない国」(文藝春秋)	61
林真理子「野心のすすめ」(講談社)	61
河村幹夫「人生は65歳からがおもしろい」(海竜社)	61
半藤一利「日本型リーダーはなぜ失敗するのか」(文藝春秋)	62
2013年10月	63
内田樹「修業論」(光文社)	63
「覚悟の磨き方 超訳・吉田松陰」(サンクチュアリブックス)	64
江波戸哲夫「団塊世代の二万二千日」(リベラルタイム出版社)	65
中根千枝「タテ社会の人間関係」(講談社現代新書)	65
寺島実郎「時代を見つめる目」(潮出版社)	65
百田尚樹「リング」(PHP研究所)	66
西口啓「統計学が最強の学問である」(ダイヤモンド社)	67
平野啓一郎「私とは何か―「個人」から「分人」へ」(講談社現代新書)	67
百田尚樹「永遠のゼロ」(講談社文庫)	68
2013年11月	68
青木美智男「小林一茶―時代を詠んだ俳諧師」(岩波書店)	68
今日出海「私の人物案内」(中公文庫)	70
宮田律「イスラムの人はなぜ日本を尊敬するのか」(新潮新書)	70
山内太地「大学のウソ 偏差値60以上の大学はいらない」(角川書店)	71
2013年12月	71
「司馬遼太郎の「遺言」―司馬遼太郎さんと私」(夕刊フジ)	71
日下公人「日下公人が読む2014年～日本と世界はこうなる」(ワック)	72
童門冬二「50歳からの勉強法」(サンマーク出版)	73
司馬遼太郎「播磨灘物語」(講談社)	74
立花隆「自分史の書き方」(講談社)	74
芦原すなお「青春デンドケデケデケ」(河出文庫)	74
北杜夫「どくとるマンボウ青春記」(新潮社)	75
井上ひさし「青葉繁れる」(文春文庫)	76

2013年1月

緒方貞子「私の仕事」(草思社)

「緒方貞子という生き方」という本がある。

それほど、この人の働く姿には魅力があり、頭が下がる思いをする。

緒方貞子(1927年生。現在85歳)は、1991年から国連難民高等弁務官としてクルド、サラエボ、ルワンダなど長い間世界の難民支援活動に取り組み、その後2002年にはアフガン復興支援国際会議の共同議長、そして日本の国際協力の総本山であるJICA(国際協力機構)の理事長をつい最近まで長く務めた人である。

国連難民高等弁務官に就任したのは63歳の時である。

聖心女子大卒業後、ジョージタウン大学で修士号、カリフォルニア大学バークレー校で博士号を取得、50歳前の76年から国連日本政府代表部公使、特命全権公使。上智大学教授として外国語学部長などを歴任している。

国連難民高等弁務官以降の緒方貞子の足跡を追うと、難問と大問題との格闘の歴史であるとの感を深くする。

あらゆる国々の首相や大臣、あらゆる機関のトップ、こういう人たちと毎日会いつづき、世界の様々の機関や大学での講演を重ね、現地で難民と接していく。、国際紛争や内紛で生じた数百万人の難民を保護するために、問題を解決しようと時間と労力と人脈を駆使していく姿は神々しい。

国連難民高等弁務官事務所の本部はスイスのジュネーブにあり、職員総数は2000人。4分の3は現地で活動している。任務は、保護と救済である。

2003年(76歳)から2012年3月末まで緒方貞子がトップをつとめていたJICAは1.2兆円の規模を持つ日本の重要な世界貢献の本拠である。政府開発援助(ODA)の二国間援助の中心的役割を果たしている。2011年の東日本大震災では世界各国から援助の手が差し伸べられたが、それは緒方JICAの果してきた世界への影響の一端を示すものだと思う。そのJICAに私も少しだが関与していることに誇りも感じる。

緒方貞子は「小さな巨人」とも言われている。天命に沿って使命感を持って60代から10単位という長い時間を問題解決に捧げ、少しずつ前進していく姿は神々しい。

以下、「私の仕事--国連難民高等弁務官の十年と平和の構築」(緒方貞子・草思社)から。

- ・ 中央からの柔軟な調整と、現地における実施機関の対応能力の強化が、問題解決の鍵か。
- ・ 経済制裁は、弱い人を苦しめる。
- ・ 日本は、経済大国から人道大国になってほしい。
- ・ 体系的に理解するというのは、答えを持っているということではなく、何が問題なのか質問ができる、ということではないでしょうか。

- ・ 湾岸戦争後、国連平和維持協力を成立させ、国際協調主義的な姿勢を示し、アンゴラ、カンボジア、モザンビーク、ゴラン高原、リワンダ、などに自衛隊を派遣した。その後、90年代の不況によって日本の指導者層は内向きになっていった。
- ・ 人間は仕事を通して成長していかなければなりません。その鍵となるのは好奇心です。常に問題を求め、積極的に疑問を出していく心と頭が必要なのです。
- ・ 日本人は意識的に世界各地にある厳しい状況に関心を寄せ、身を置く努力をしなければならぬのではないのでしょうか。
- ・ コンセンサスというのは、自然に形成されるものではなく、強力なリーダーシップで引っ張って初めて、形になるものなのです。
- ・ 国の内外を問わず、自分で歩いてみることを、若い世代にすすめます。

曾祖父は犬養毅、祖父は外相、母は犬養道子や安藤和津の従妹。日銀理事だった夫は、緒方竹虎の三男。竹虎の祖父は緒方洪庵と義兄弟の盟を結びその姓を名乗った。名門の出である。貴種性が宿っているのだろう。

国連難民高等弁務官就任以降の活躍に、世界各国からの感謝が栄典という形で贈られている。こうやって並べてみると、日本の文化功労者や文化勲章の光も色が褪せる。

- 1993年：イタリア金の鳩平和賞
- 1994年：自由賞(自由主義インターナショナルより)
- 1995年：フィラデルフィア自由賞
- 1997年：マグサイサイ賞平和・国際理解部門
- 2001年：文化功労者
- 2001年：インディラ・ガンディー賞
- 2001年：ドイツ連邦共和国功労勲章大功労十字章
- 2001年：レジオンドヌール勲章コマンドール
- 2001年：イタリア共和国功労勲章カバリエーレ大十字
- 2001年：スウェーデン北極星勲章コマンドール第1等級章
- 2001年：ロシア友好勲章
- 2002年：フルブライト賞
- 2003年：文化勲章
- 2004年：東京都名誉都民
- 2005年：世界市民賞
- 2008年：オラニエ・ナッソー勲章グラントフィシエ章
- 2009年：第3回後藤新平賞(後藤新平の会主催)
- 2011年：聖マイケル・聖ジョージ勲章デーム・グランド・クロス(GCMG)
- 2011年：キルギス共和国ダナケル勲章

2012年：地球市民賞(大西洋評議会)

朴槿恵「絶望は私を鍛え、希望は私を動かす【朴槿恵自叙伝】」(晩聲社)

パククネ韓国次期大統領の自叙伝「絶望は私を鍛え、希望は私を動かす」を読了。

1952年朴大統領の娘として誕生。大学では電子工学(首席卒業)を学びフランスに留学。22歳、ファーストレディ代行。45歳、政界入り。46歳、国会議員当選。52歳、ハンナラ党代表。

母と父を凶弾によって失い、自身も襲われた経験を持つ。

- ・ 1974年、父の演説の最中に銃弾で母が死亡。享年48歳。パククネ22歳。
- ・ 1979年、父の朴大統領が側近との食事中、KCIA部長にピストルで撃たれて死亡。パククネ27歳。
- ・ 2006年、応援演説中に暴漢に襲われ負傷。パククネ52歳。

以下、人物像と日本観がわかる部分をピックアップ。

- ・ 権力が貴重なのは、国民のために多くの仕事ができるからである。
- ・ 勤勉な鳥が新鮮な餌を得る(母の教え)
- ・ 私の人生に恋愛らしいものは一度もなかった。
- ・ 私には両親もなく、これ以上得るものも失うものもありません。党のために私の全てを捧げます。
- ・ 私は世界のどの国に行っても訪問初日は同胞に会う。
- ・ 私は、北朝鮮の核武装だけは絶対防がねばならないと考えている。
- ・ ミニホームページ(2004年2月開設。「パククネ・ミニホームページ」<http://www.cyworld.com/ghism>)は、私の公的な生活にも大きな影響を与えた。私が政治家として、今後すべきことに対する深い省察の機会となるからだ。、、サイトは私がいつも叫んでいた「国民生活政治」の羅針盤になってくれた。
- ・ 他のいかなる国との関係より忍耐が必要なのが、日本との外交だ。、、今後、東北アジア経済共同体を作り、共に未来を開いて行かねばならないパートナーなのだから、。。
- ・ 歴史問題を私たちの世代で解決せねばならず、後の世代に負担をかけてはいけない。、、歴史問題を解決できなければ、韓日両国は無限の可能性を持ってはいるが、一歩たりとも先へ進めない。、、
- ・ 竹島問題、教科書問題、靖国参拝、慰安婦問題、。。早く解決して未来に進まねばなりません。

リー・クアンユー 「リー・クアンユー回顧録」(下巻) (日本経済新聞社)

581 ページという大部の「リー・クアンユー回顧録」(下巻)を読了。

1965年にマレーシアから分離独立した淡路島、東京23区とほぼ同じ面積を持つ多言語・多国籍からなる人口国家の建設、という途方もない難題に取り組んだ英雄の考え方と足跡がわかる本だった。この国家はマレーシア、インドネシアに囲まれた島国であり、地理的にも気候的にも厳しい環境だった。

マレーシアからの水の供給を断つという脅しに対処するために、イスラエルと台湾から援助を得てゼロから国軍を創設する。英国の撤退、金融センターの創出、労働組合への勝利、住宅供給と健康管理と年金などの公正な分配、共産主義への勝利、中間票の獲得など一連の基本的な政治施策を推し進めた。

多言語社会をどう克服するか。マレー語、中国語、タミール語、英語の4つを公用語と定めた上で国際語である英語ができる人が専門的職業に就け高給を食むことができることを知って自然に英語を使える国民ができあがった。このことが経済の発展とIT技術の浸透につながった。一方で伝統的価値観の保存も必要でそのための措置も講じている。日本はアメリカの影響を受けても日本人のままで勤勉で社会貢献に重きを置いていると評価している。

清潔な政府をどうつくるか。「クリーン行政」を志向しアジアでもっとも汚職の少ない国となった。選挙に多額の資金がいらぬ政治システムが必要である。多額の資金が必要なら当選後にそれを取り戻そうとするから汚職が蔓延することになる。清潔さを保つためには政治家と政府高官の報酬を有能な他分野の人びとと遜色のないレベルにすることが必要だ。日本は世界でもっともお金のかかる選挙システムを持つ国と分析し、公共事業で結びついた建設業者などの企業が協力しているとしている。

マスコミをどう管理するか。外国プレスに免許を与えてシンガポールで誤報や国家打倒のキャンペーンをはることは許していない。

政府をどう運営するか。政府の運営は有能なチームを指揮するオーケストラの指揮者のようなものという考え方で、その時々により重要な課題を抱えた省に常に最高の人材をあてることにしている。そして目標を設定しあとは任せるが、政府の失敗の責任は首相がとる。今やアジアのハブ空港となったチャンギ空港はわずか6年というスピードで完成している。IT技術の早期導入は競争力を高めた。リー首相は70歳でコンピュータを学んでいる。

1967年に結成した近隣諸国との東南諸国連合、そして1965年に22番目のメンバーとして加盟した英連邦は、シンガポールに多くに利益をもたらしている。アセアンの協力によって1997年からの東アジア経済危機に対処し、英連邦のネットワークによって各国の元首たちから貴重なヒントを得ている。

日本をどう見ているか。

「旧日本軍のシンガポール占領後の残虐行為」を忘れないリーは、「日本は平和的

で非軍事的ではあるが、決して本気で悔い改め謝罪しない国である」と言っている。池田勇人から橋本龍太郎まで歴代の首相の印象を語っているが、荒削りでダイヤモンドのような魅力を放っていたと田中角栄首相を評している。歴代の自民党政権は日本の過去と向き合うことはしてこなかった。ドイツ人の行っている歴史教育の方法を学ぶべきだという。日本人は精神の浄化ができていない。毒を取り去っていない。過ちを認め、謝罪し、前進して、より大きな信頼と信用を得てともに前進して欲しい。日本の文化は強靱で知能指数は欧米人より高い。日本はいかなる災難も克服していけようが、極端に振れるのが怖い点である。

韓国。肉体的には日本人より頑健だが、まとまりと献身の点では日本人には及ばない。激しい国民で容易に妥協しない。北朝鮮がIT技術の発展にもかかわらず情報統制で国民の世界観を形成することに成功したら非常に危険だと警鐘を鳴らしている。

「朴はムダ話をしなかった。英語を話す20代の彼の娘が、会話をリードした」という記述があった。この娘がパク・クネ次期大統領だ。

中国。人口の4分の3を占める華人の故郷。海外華人はタイ、マレーシア、フィリピン、インドネシアに対して脅威を与えている。アセアンは中国から放送を通じて直接華人に働きかける姿勢を危険な反政府活動ととらえている。とう小平を高く評価。「窓を開ければ新鮮な空気と一緒に蠅や蚊が飛び込んでくる」

日本について、アメリカが頼りにならないとなれば日本は一人歩きを始めるかもしれない。東南アジアの全ての国に対する脅威は増大する。核武装の危険もあると懸念する。

中国は、地域覇権国家の道を選ぶか、国際社会のよき一員として成長の道を歩むかの二者択一の選択になる。今後中国は50年の間に、計画経済から市場経済へ、農村ベースから都市ベースへ、共産主義社会から市民社会への移行である。致命的な問題は汚職である。

よい政治には、よい人間が必要だ。首相は目標と達成期限を明確にする。任せられた人はいちばんいい方法をみつける。人物鑑定でもっとも難しいのは人柄の評価だ。人格がより重要だ。分析力、想像力、現実感覚。大きな観点から事柄や問題を見る能力、問題点を明確にして取り出す能力。

最後に、31年間首相をつとめたリー・クワンユーは「私は運がよかった」と回顧している。仕事、家族、兄弟姉妹の関係もいい。

「アジア太平洋地域の平和と安全は、アメリカ、日本、中国の三角関係次第である」と語っている。バランスが保たれば地域の将来はよくなりシンガポールは世界に役立っていける。日中関係、日米関係、米中関係。日本への期待は大きいことがこの言葉でわかる。

この分厚い本を読み終えて思うことは、リー・クワンユーは内外に問題を抱える人口国家の建設という難題を見事に解いた稀有の人物であると思う。

問題の設定と解決の道筋の決定と不屈の精神、そして柔軟な修正。優れた人材を使いこなすリーダーシップ。大局的世界観。現実感覚。人物を見抜く目、、。各国首脳の人物評がいい。

日本に対しては、憎悪と尊敬の入り混じった感情を抱いている。日本人の能力と態度には敬意を表してはいるが、その暴発も恐れている。

何よりも過去の謝罪と未来へ向けての繰り返さない方策を求めている。そこから再出発してくれという強いメッセージを受け取った。

大前研一「クオリティ国家という戦略」(小学館)

大前研一はボリューム国家でもない、加工貿易国家でもない、第3の国家モデルとして「クオリティ国家」を提示する。

人口は300万から1000万。オーガナイズ・スモール。モデルはスイス、シンガポール。ノルウェー、デンマーク、フィンランド、スウェーデン、韓国、台湾、、。日本は大きすぎるので道州制を導入すべき。北海道はスイスかデンマークになれる。九州は年間1000万人の観光客を集めることができる。まず、大阪、関西から始めよ。

リー・クワンユーの本を読んだばかりだったが、それから10年以上経ってシンガポールはどうなったか。

- ・ 一人当たりGDPは2007年に日本を抜いてアジア最強国家。億万長者は全世界の18%で世界一。
- ・ 1965年分離独立、労働集約型産業(組み立て)。1970年代、高付加価値産業(コンピュータ、機械)。1980年代、サービス産業強化(金融、通信)。1990年代、IT2000。2000年代。知識集約型産業(金融、バイオ、医療)。2010年代、エンターテインメント(カジノ、)。
- ・ ハブ拠点戦略。金融ハブ(プライベートバンキング)。空港ハブ(チャンギ国際空港。LCCターミナル)。港湾ハブ(香港とトップ争い)。教育ハブ(トップクラスのビジネススクールを誘致)。医療ハブ(メディカルツーリズム)。データマネジメントハブ(アマゾンがサーバー設置)。R&Dハブ。コンベンション・観光ハブ(国際会議・カジノ)。
- ・ 500社の多国籍企業がアジア本社。
- ・ 部課長クラスは50坪以上のマンションに住む。ジムとプール完備。アセアンの首都。
- ・ 年金不安がない。年率10%でまわしている。

浜田宏一「アメリカは日本経済の復活を知っている」(講談社)

- ・ すぐにハイパー・インフレになることはない。緩やかなインフレ、駆け足のインフレ等を経て、おもむろにやってくるのが分かっている。洪水なのに火事を心配するな。日銀はインフレ対策の名人。
- ・ ドル暴落はあっても円の暴落はない。通貨の価値は政府ではなく国民全体の信用によって決まる。日本の対外純資産は 250 兆以上で世界トップクラス。(中国 137、ドイツ 93、、、フランス-22、イギリス-24、イタリア 34、アメリカ-201)

2013 年 2 月

帚木蓬生「日御子」(講談社)

帚木蓬生「日御子」を読了。2-3世紀の弥摩大国と漢・魏・晋と韓半島との交流と女王・日御子の物語。通訳を家業とする使譯(しえき)の「あずみ」一族の代代が語り部となって物語が展開する。一族の教え「人を裏切らない」「人を恨まず、戦いを挑まない」「良い習慣は才能を超える」、「仕事の中身を変えるのが骨休め」を軸に展開する。鉄、倭国、那国と奴国、金印、生口、氷室、紙、文字、人と人を結ぶ、天と人を結ぶ日御子、人の人たる土台、親魏倭王、戦いへの備えと交易は裏表、玄学、、、。

朝井リョウ「何者」(新潮社)

23 歳で直木賞を受賞した朝井リョウの受賞作品。この人は東宝の新入社員で営業をやっている。社会人になったその時点で二足のわらじを履いている。そのスタイルを続ける予定だそうだ。

6 人の大学 4 年生の就活物語で、現代の就活事情とその渦中にある大学生たちの気分や心の動きがよく描かれている。

劇団主宰の主人公、バンドをやってる同居の友人、その恋人で主人公が片思いの女子、海外留学組の女子、就職しないと宣言する人、、、。

ツイッター、フェイスブック、ラインなどのソーシャルメディア空間と、現実とが混ざり合って物語が進行していく。やはりこの作家は名手だ。

主人公は恋も就活も出遅れるのだが、最後は自分を自分として認めることができるようになって、希望につながっていくところで終わる。

面接で分析家の主人公は「短所は、カッコ悪いところですよ」「長所は、自分はカッコ悪いということ、認めることができたところですよ」という。最後は「だけど、落ちてても、たぶん、大丈夫だ。不思議と、そう思えた」で終わる。

癖、消耗、もどかしくなる、想像力がない人、何者かである自分、探り探り、っへえー、

ぬるぬる文系、もやもやと黒ずむ、ぶしゅう、人脈、バランス、蓋、違和感、不正、麻薬、やさしい言葉で心を撫でる、痛々しい、ささらない棘、羨ましさとうつつしさ、思ってもいないことをすらすらと語る技、面接で落ちるダメージ、ミスが見えない、エリア職なんだね、ジコジツゲン、プライド、人生のドラマの主人公、就活が得意なだけ、、、、。

登場人物たちが互いに投げかける言葉の中に、共感するなかなかいい言葉がある。

- ・ 誰かの視線の先に、自分の中のものを置かなきゃ。
- ・ ダサくてカッコ悪い自分を理想の自分に近づけることしか、もう私にできることしかないんだよ。
- ・ 自分は自分にしかなれないんだよ。
- ・ そうやってずっと逃げていけば？
- ・ 自分はアーティストや起業家にはきつともうなれない。だけど就職活動をして企業に入れば、また違った形の「何者か」になれるのかもしれない。そんな小さな希望をもとに大きな決断を下したひとりひとりが、同じスーツを着て同じような面接に臨んでいるだけだ。

何者かであるように自分を飾る日々から、何者でもない等身大の自分の姿を知って、そして時間をかけて何者かを目指していく。そういう誰もが経験する青春の成長を描いた作品だ。

就活は、そういうプロセスを踏む上で自分を映す鏡のような存在だ。

就活生にも教師にも親にも、勧めたい作品だ。

田村慶子「頭脳国家・シンガポール」(講談社)

「頭脳国家・シンガポール」(田村慶子)読了。先日、リー・クアンユウ回顧録(下巻)を読んだが、印象がかなり違う。シンガポールは「笑顔の北朝鮮」という言い方もある「超管理国家」だ。為政者の認識と国際関係論を専門とする学者の分析の違いが際立っている。1993年発行。

田村慶子「シンガポールを知るための62章」(明石書店)

「シンガポールを知るための62章」(田村慶子)を読了。こちらは2008年発行と新しい。

山本紀夫「梅棹忠夫一知の探検家の思想と生涯」(中央公論新社)

山本紀夫「梅棹忠夫一知の探検家の思想と生涯」読了。

以下、梅棹先生の言葉を本書から抜き出してみた。

- ・ 梅棹のモットー「自分足であるき、自分の目でみて、自分の頭でかんがえる」こと。
- ・ 「発見の手帳」をたゆまずつづけたことは、観察を正確にし、思考を精密にするうえに、ひじょうによい訓練法であったと、わたしはおもっている。
- ・ 「君たちがいる。そして、わしがいるではないか。われわれにやれなくて、だれがやるのだ。」(今西欣司。大興安嶺探検)
- ・ いままでは山登りは山登り、昆虫採集は昆虫採集で、なんの結びつきもなかったものが、生態学を媒介とすることにより、それが一つになる。
- ・ つぎつぎに横にあるいて、のちには、ついに学問の二大分野である自然科学と人文科学との垣根をもこえて、民族学を専門とするようになってしまった。
- ・ 「関係」を現象的に把握する方法として「干渉」という概念を提唱する。
- ・ 生態学的手法を人間に適用することによって、人文・社会科学の方面にゆるやかに転身しようとはかっていた。
- ・ 旅行と知識は同義語である。機会をとらえて、日本をあるこう。
- ・ 遷移(サクセッション)。主体と環境の相互作用の蓄積によって、新しい生活様式に変化する現象。
- ・ 岩波新書「南極越冬記」
- ・ 写真ではあかん。写真では細部の構造がわからへんのや、目で見て、構造をたしかめて、その構造を図に描くんやからね、ようわかる。
- ・ 方法さえよければ、語学は一か月でいちおうはものになるものだという確信をえた。、その方法とは、まず現地でまなぶことである、一日に300のあたらしい単語をおぼえることは、すこしもむつかしいことではない。
- ・ 後世の子孫から「ご先祖さま」とあがめられ、まつられたい、ということでありませぬ。
- ・ 衣食足りて頹廢をするのである。
- ・ 研究業績を展示するための書架の設置、研究広報誌「民博通信」の末尾に掲載された教官の刊行物一覧、業績(著書に限定)を展示するための館長室の書棚設置、。
- ・ 立つ本を作れ。一年間に1000枚は書け。
- ・ 各個研究と共同研究
- ・ 大部分が他人の著書の引用と紹介で、独創的部分はごくわずかだ、ということがおおい
- ・ 二番せんじは、くそくらえ、だ

- ・ 未知のものと接したとき、つかんだときは、しびれるような喜びを感じる。
- ・ 「梅棹忠夫・山と探検文学賞」(2010 年)。本賞の創設がきっかけとなって、登山や探検活動がさかんになり、おおくの人びとの心に「未知への探求」の火が燃えさかることをねがっております。

私自身大きな影響を受けたこの偉大な学者の著作集に挑戦しなくてはならない。

津村節子「夫婦の散歩道」(河出書房新社)

亡くなった吉村昭の妻で同じく作家の津村節子のエッセイ。

「三陸海岸大津波」を書いた吉村昭の作家生活、日常などを興味深く読んだ。

三菱重工長崎造船所史料館吉村昭コーナー。日南市の小村寿太郎記念館。

岩見隆夫「昭和の妖怪 岸信介」(中公文庫)

岸信介(1896-1987 年)は、「満州」と「安保」をやり遂げた。

39 歳で満州に渡り 3 年余にわたって満州国の運営と統治に実績を引っ提げ、日本の商工省次官として凱旋。東条内閣の商工大臣と軍需次官になるが、衝突し東条内閣をつぶす。戦犯容疑で 3 年 3 か月の間巣鴨に入るが幸運にも戦争犯罪人の重罪をまぬがれる。53 歳の再出発だ。その後、世界に入り、緒方竹虎というライバルの死という幸運や石橋湛山首相の病気退陣などの幸運によって、一気に総理の座をつかみ、不平等条約である日米安保の改定に成功し退陣する。辞任後も長い間、隠然たる力を保持した。

岸信介は、1960 年の日米安保改定の首相として批判が多い人物である。岸は故郷の吉田松陰を尊敬していた。

この岸には常に金にまつわるうわさが絶えないが、それ明らかになったことはない

この人は悪評紛々なのだが、高杉晋作に知性をつけたような人物という評があるように近い人は一様に「偉い人」だと誉め、近づくと朗らかな態度にファンになる人も多い

また風評と実物のギャップが極めて大きな人物で、複層的な複雑な性格を持つ岸は、やはり妖怪であるということで、本書のタイトルがついた。「妖怪」という岸評は、この書に負うのだろう。

現在でもテレビで顔を見せる筆者の岩見隆夫(1935 年生)は、1979 年にこの書を書きあげるのだが、本人に対するインタビューでは警戒しながらも岸の魅力にひきこまれながら、慎重に筆をすすめている。この当時、岸は 82 歳だったが、生臭さを失ってはいなかった。

2012 年の文庫版にも岩見のあとがきが載っている。33 年の時間が経っているが、岩見は「岸は妖怪的ではなく妖怪と言い切っていいだろう」と改めて述べている。

この本では、国歌の運命を委ねられた最高指導者の考え方と行動が明らかにされている。

「内閣というものは、時期が長いのが偉いんじゃないに、何をしたかということが問題であってね」

2013年3月

キケロー「老年について」(岩波文庫)

古代ローマの哲学者・政治家・キケロー(BC106-43)の傑作。

老年の惨めさと言われる理由。

1. 公の活動から遠くなる。
2. 体力が弱くなる。
3. 快楽から遠くなる。
4. 死に近い。

それぞれを主人公の84歳の大カトーは否定する。以下、書いてあることを自分の言葉で書きとめた言葉。

1. 活動について。

思慮・権威・見識で大事業を成し遂げられる。若者は無謀、老人は深謀。熱意と勤勉の持続によって知力はとどまる。次の世代のために木を植える。

2. 体力について。

体力の衰えは青年期の悪習の結果だ。体力を欲しがり過ぎることはない。円熟。鍛錬と節制によって往時の頑健さを保てる。弱い老人は病弱の人に過ぎない。病と同じく老いとも戦わねばならない。ほどよい運動と体力の回復のための飲食。肉体、精神、心を労わる。だらしなく老年に屈するな。知力と精神の鍛練。

3. 快楽について。

快楽ほど忌まわしく害毒のあるものはない。肉体的な快楽より友との会話。快楽の疼きはそれほど多くない。研究や学問という糧があれば閑のある老年は喜ばしい。老年の誉れの最たるものは影響力だ。名誉公職にある老年には高い権威がある。よき老年は青年期の基礎の上に打ち建てられる。まっとうに生きた前半生は最後に権威という果実を得る。性格の欠陥であり老年の咎ではない。老年は欲望に支配されなくなる。

4. 死について。

死は老年と青年とに共通のものだ。老人の死は成熟の結果であり自然なことであるが青年の死とは力づくで奪われることだ。青年、壮年、老年と人生の全ての局

面で仕事に満ち足りることが人生に満ち足りることになる。人間はそれぞれふさわしい時に消え去るのが望ましい。

この老年賛歌の書物は、老年が悲惨であるとのそれまでの常識を破り、老年を謳いあげた最初の書物である。

老人になることを憂うのではなく、どのような老人になるかをテーマとすべきだと思う。老年に向かう考え方に共感する。

市井三郎「歴史の進歩とは何か」(岩波新書)

ダーウインの進化論は進化と進歩を混同している。マルクスの科学的な弁証法的唯物論は現実に裏切られた。

パラドックスを超える視点が必要--自由を突き詰めれば平等ではなくなる。多数決は少数の独裁を生む。寛容は非寛容者を生む。主権者が委任すれば奴隷になる。正義を突き詰めれば戦争が起こる。

人類の歴史の「進歩」をはかる価値基準は何か。それは「幸福」な状態への移行だ。

各人の責任を問われる必要のないことから受ける苦痛(不条理)を、減らさねばならないという歴史の進歩についての理念を提案。

人種・民族・階層。奴隷制。素性・毛並。こういった不条理は歴史的に少しずつ減ってきた。

この理念の実現のためには、苦痛の減少のためにみずから創造的苦痛を負う覚悟の人間の出現と存在が不可欠である。

ただ今現在、不条理な苦痛をより多く負っているのはどちらの側かという視点が必要となる。

この理念は対立を内蔵していないから、普遍的な理念となりうる。

ハインリヒシュリーマン「古代への情熱—シュリーマン自伝」(岩波書店)

トロヤ戦争の物語を絵本で読んだ少年シュリーマン(1822-1890年)は、美しい古都が地下に埋もれていると信じ発掘を志す。そのための語学などの猛烈な勉学と商人としての経済的勝利を携えて、遂に鍬と鋤によって発掘を開始する。そして伝説と信じられていたトロヤ文明の発掘に成功する。そしてミケネ文明も発掘する。シュリーマンはこの二つの文明の発掘者として歴史に名前を刻んだ。

シュリーマンは14歳から小僧として働き始める。いくつかの職場を変えて22歳でアムステルダムンのシュレーダー商会に入り、その後は商人として大活躍し、また幸運にも恵まれて、大成功を収める。この間、英語、フランス語、オランダ語、スペイン語、イタ

リ語、ポルトガル語、ロシア語、スウェーデン語、ポーランド語、現代ギリシャ語、古代ギリシャ語、ラテン語、アラビア語、ヘブライ語を習得する。

42 歳。生涯の大目的を実現するための手段であった金銭を十分に確保したので、すべての実業を清算し、少年時代の夢であったトロヤの遺跡の発掘という大プロジェクトに入って行く。その大事業の前に、世界を周遊し、インド、中国、北アメリカを旅する。このとき、シュリーマンは日本にも寄っている。幕末の横浜に着き「絹の道」をたどり八王子まで足をのばしている。また江戸を見ている。このあと最初の著書「シナと日本」を書いた。

49 歳からいよいよトロヤの発掘にかかり、「プリアモスの財宝」を発見する。

「この宝庫はその一つをおってしても大博物館をむたすにたり、世界最大の驚異となり、またきたるべきいく世紀にわたって全世界の数千の異国の客をギリシャに引きよせるであります」とギリシャ国王に電報を打った。

54 歳、ミケネ発掘。68 歳、ナポリにて死去。

シュリーマンは異常な努力によって 15 カ国語を話し、書くことができた。

彼は切迫した境遇の中であらゆる言語の習得を容易にする方法を発見する。

「非常に多く音読すること、決して翻訳しないこと、毎日 1 時間をあてること、常に興味ある対象について作文を書くこと、これを教師の指導によって訂正すること、前日直されたものを暗記して、次の時間に暗唱することである。」

また、難解な古代ギリシャ語については、学校でとられている方法はまったく誤っていると語っている。

「ギリシャ語文法の基礎的知識はただ実地によってのみ、すなわち古典散文を注意して読むこと、そのうちから範例を暗記することによってのみ、わがものとするのできるのである。」

また、シュリーマンは 12 歳から 68 歳で没するまで、50 年以上に亘って日記をつけ、ノートを残している。

「私はつねに 5 時に起床し、5 時半に朝食、6 時に仕事をはじめて、10 時まで休まず。」

「私の習慣としてつねに早朝 3 時 45 分に起床し、、、次に水浴した。」

「床に入る前に日記をつける」

大事業の成功はシュリーマン夫人ソフィアの手助けも重要だった。

少年の頃、トロヤの発掘という野望を抱いたシュリーマンは、ミナという少女と恋をする。ミナだけは彼のことをよく理解していたのだ。ミナが 14 歳のときに偶然再会するが、満足に話もできなかつた。経済的な基礎を築いた 24 歳のとき、友人を通じてミナに結婚の申し込みをするが、彼女は数日前に他の人と結婚していた。

晩年は莫大な財産、鋼鉄の体で、個人的な交際を楽しみながら、研究に専心しながら日々を過ごした。しかし晩年の 10 年間は反対者との戦いでもあった。

この本の中では、シュリーマンは、「不屈の人。自成の人。セルフメイドマン。熱情家。実地的な人間」などと描かれている。

シュリーマンは、人生の前半を志の実現のための手段として金を稼ぎ、それがなるときっぱりと実業を清算し、人生の後半をトロヤの発掘にかけていく。

たった一人の少年が抱いた志が生涯をかけて形になっていき、歴史を塗り替える。奇跡の人の物語だ。

福沢諭吉「現代語訳 文明論之概略」(ちくま文庫)

福沢諭吉の代表作「文明論の概略」の現代語訳(斎藤孝訳)を読了。

こなれた現代語訳なので、福沢の言わんとすることをよく理解できた。

福沢は封建時代の江戸時代と文明開化の明治時代の両方を、身を持って知っていると心得難い経験をしているので、人間精神の発達について述べるのにふさわしいとして本書を書いた。

そしていずれ後世の学者が本当の「大文明論」を書いて欲しいと希望している。梅棹忠夫先生の「文明の生態史観」などはそれに対する答えの一つという意識で書かれたものだろうか。

高い見地から過去の歴史を見て、生きた目をもって未来を見通すことが必要だと言う通り、極めて示唆に富む名著である。以下、まとめ。

物事は枝葉末節から離れて、大本にさかのぼって「議論の本位」を定めるべきだ。議論がかみ合わないのは、互いに極端を言うからだ。それではおさまりがつかなくなる。物事には長所と短所があり、両目で見なければならぬ。そうしたことを克服するために必要な有力な手段は人と人との交際である。利害得失を論じるには簡単だが、難しくまた大事なものは物事の軽重と是非を明らかにすることである。

西洋文明の事物については作ることも金で買うこともできるが、「文明の精神」はそうはいかない。文明の精神とは、人民の「気風」のことだ。一国の気風とは時勢と人心である。アジアとヨーロッパの違いの大きさは、この文明の精神によっている。

自由の気風は、「多事争論」の間にある。中国は独裁君主を仰いできたから思想が乏しくなった。日本は最高の地位の天皇と、最強の将軍がバランスをとっていたために、わずかながら思想が運動することができたのは幸運だった。

日本は国の始めから国体が変わったことはない。それは外国人に政権を奪われたことがないという一点が見事なことなのだ。したがって日本人の義務とはただこの国体を保つことにある。

文明は一大劇場のようなものであり、海のようなものである。文明とは人の身を安楽にして心を高尚にすることをいう。衣食を豊かにして人格を高めることをいう。

文明国になれるかなれないかは国全体に行きわたっている気風による。その気風は智徳のあらわれであり、それには時勢を考えることが必要だ。

孔子は時勢をしらなかつた。楠木正成は足利尊氏という時勢に敗れた。

智徳の徳とはモラル(恥じることがない)であり、智とはインテレクト(考えること)である。この二つを兼ね備えていなければ十全な人間とはいえない。

徳には、私徳(謙遜・律儀、)と公德(公正・公平、)がある。

智には、私智(物事の理を定めてこれにしたがう)と公智(軽重大小を区別し、優先順位をつける働き)がある。

わが国で「徳」と言っているのは個人的な私智であり、受け身の徳であり、卑屈な我慢を勧めるものだ。

徳は内にあり、智は外にある。私徳の効能は狭く、智恵の働きは広い。徳については後世に進歩はないし、試験もできない。一方、人間の智恵は教育によって生じるもので無限に進歩する。

一向宗の信者は他力を求め何もしない。儒者は孔孟の書を読むだけ。和学者は古書を詮索しているだけ。洋学者はただ聖書を読んでいるだけだ。

宗教とともに、学問と技術を学ぶことで、わが国の文明の水準を高めることが重要だ。

日本には神道・儒教・仏教があり、徳は不足していない。智恵の獲得が優先すべきことだ。

時代と場所に依じて進歩することが大切だ。失敗はこの二つを間違えたものであり、成功はよく合ったものである。この二つを判断するのは難しいことである。

文明が発達し、智力が進んで「疑い」の精神が生じた。利を取り害を避ける工夫をするようになった。自力で解決できることが明らかになり、勇気が生じてくる。人民の智恵が増加すると君主の仁徳を輝かす余地がなくなった。

規則が増えていくのはやむを得ない。規則によって善人を保護するのだ。

文明における自由とは、他者の自由を犠牲にして実現すべきものではない。

権力は必ず墮落するし、権力の偏重はあまねくいきわたっている。日本の歴史は、日本政府の歴史があるだけだ。宗教や学問も独立してはいない。

儒教や仏教も古を理想化した弊害を持っている。両者とも半ば政治に関する学問だった。要するに「気概」が不足しているのだ。その結果、物事を「やってみる」精神を失ってしまった。貧富や強弱は、人智によって左右できるのだ。

経済の第一原則は、財を蓄えること、そしてそれを消費することだ。蓄積と消費を盛大に行う国を「富国」という。第二の原則はその財にふさわしい経済的な智力と習慣が必要ということだ。財が乏しいのではなく、その財を運営する智力が乏しいのだ。いや、智力が上下に分断されているのが問題なのだ。

外国交際を盛んにすべきだ。これはわが国の一大難病だ。これを治療するのに頼

みになるには自国の人民をおいてない。

国の独立を保つには、目的を定めて文明に進むしかない。独立とは偶然に独立している状態ではなく、独立すべき力があることを指す。

自国独立を掲げて内外の別を明らかにして民衆の進むべき道を示せば、それを基準として物事の軽重が決まってくる。

嘉納治五郎「嘉納治五郎私の生涯と柔道」(日本図書センター)

「嘉納治五郎私の生涯と柔道」(日本図書センター)を読み終わった。

一生一つの道を歩んだ偉い人の記録である。

嘉納は体が弱く子どもの頃には常に人の下風に立たざるをえないことで発奮し、心身の鍛錬で克服しようと柔術の世界に入っていく。そして様々の流派から学び、それらを総合して心技体を磨くという「柔道」を開発し、それを日本と世界に広めていった。人を集め、道場を開き、形を整え、雑誌を発行し、会をつくり、オリンピック東京誘致に成功する。

また、東京高等師範という教育者を育てる学校の校長を累計 25 年の長きにわたって務めており、教育界における人材輩出に大きな功績がある。

- ・ 一体自分は、或る事に従うとなれば、自分の方からこれをやめないという大方針を持っている。
- ・ 他人に身分を頼んだこともなく、また自分で転任を企てたこともない。
- ・ 自分は永年、高等師範学校長の職にあつて、その職務上、道德教育をもっとも大切に考えておつた。
- ・ 自他共栄、
- ・ 元来自分は、一度占めたる地位はこれを妄りに去るということは、与えられたる職務をつくしたものと認めない。
- ・ 一体、なんの仕事でも、仕事は本気ですることをもっとも尊ぶ。
- ・ 師範学校は、満足して教育者の天職を尽くすというがごとき人物を養成するところにある。
- ・ 教育者は、その人の心がけ・力量及びその努力のいかんによっては、偉大なる人物を育成することが出来る。
- ・ 教育は、一人の人のなせることが、その一生の間にさえ何万人にもその力を及ぼし、さらに、その死後、百代ののちまでも、その力を及ぼすことが出来る。
- ・ 自分の成功は同時に、他人の成功をも助けて、その満足を得るのである、それが教育の愉しいことの一つである。
- ・ 道德教育が人の一生の行動を支配する。
- ・ 師範教育についてのもっとも大切な点は、生徒をして教育の力の偉大なるもの

であるということの信念を確立せしむることと、さらにこれを楽しみしむることである。

倉田百三「親鸞」(角川文庫)

倉田百三(1891-1943年)は、大学時代に「愛と認識との出発」をむさぼり読んだ経験がある。懐かしい名前だ。その倉田が親鸞をどのように料理しているのかに興味があり読んでみた。

親鸞は法然から妻帯を命ぜられる。女色のためではなく方便として犠牲になれ、肉食妻帯のまま修業するという大きな課題を与えられた。その結果、念仏停止の処罰を受け、法然は讃岐、親鸞は越後に流罪となる。親鸞は「南無阿弥陀仏」とのみ唱えれば往生できるとの真宗を開く。親鸞の最初の妻は流罪の途中で亡くなり、二度目の妻・恵信尼との間に一男一女を設ける。恵信尼の助けを借りて「教行信証」を完成させる。

流罪を許されて、20年の歳月、二つの土地で布教し成功する。そして60歳にして安逸な成功を捨てて、家族を残し布教行脚に入る。そして京都に入る。壮絶な90年の生涯だった。

以下、抜き書き。

- ・ あすありと思うころのあだ桜 夜半わに嵐の吹かぬものかは(9歳)
- ・ 経釈を詳しく知っているということが何の役に立つというのだろうか
- ・ 漁師は漁師、商人は商人のまま、念仏申せばよろしい
- ・ 自力と他力との優劣は所詮は機と時による。勝機の者には自力まさり、劣機の者には他力まさる。
- ・ みな念仏同行衆でおざるよ
- ・ それから20年の歳月は流れ、自分はもう60歳だ。今にして晩年の一奮起をしないなら、自分は結局名利の凡僧となり果てるであろう。
- ・ この親鸞はまだ60、このまま安逸にとどまる時ではおざらぬ
- ・ 信心に証拠はおざらぬぞ。
- ・ その苦しみも、恥じもそのままに、逃れぬものとあきらめて、そこに大悲のみ念仏の名を呼ぶを念仏往生と申す

解説は武者小路実篤。

「さすがによく材料をこなしている。」「親鸞と倉田が共に生きているところが面白い」「一寸倉田以上に親鸞の真髓をつかんで表現することは他の人にはできないのではないかと思う」

2013年4月

山崎光夫「開花の人―福原有信の資生堂物語」(東洋経済新報社)

一人の人物の一生を紐解くと近代が読み解けることがしばしばある。その一人が資生堂の創業者・福原有信(1848-1924年)だ。

福原は西洋医学所(のちの東大医学部)で医学と薬学を学び、薬学に方向を切り、洋風調剤薬局(資生堂薬局)、製薬会社(大日本製薬会社)、生命保険会社(帝国生命保険会社)、薬科大学(東京薬科大学)、薬剤師会などの新規事業を成功させている。

この伝記の中では幕末から明治にかけての医学と薬学に関わる人が連なって出てくる。松本良順、佐藤尚中、石黒忠直、田代基徳、長与専斎、。

医学と薬学は車の両輪であり、医薬分業が必要という考え方が基礎にある。今日の医薬分業は、資生堂薬局で福原が初めて実施したのだ。

資生堂の意味するもの。

至哉坤元(いたれるかなこんげん)

万物資生(ばんぶつとりてしょうず)

乃順承天(すなわちしたがいててんをうく)

大地はすばらしい。生あるすべてのものはここに生まれる。

万物は天に則り、坤の徳により命を受け継ぎ栄える。(「易経」の「乾坤」の「坤」)

堂は、大勢の人が集まる建物。

「随所作主」(随所に主となる)を信条とした福原は、新商品の化粧品の分野に50歳で挑戦を開始する。これが現在の資生堂につながっていく。

福原有信は、医学、薬学、化粧品というように自分の進むべき道を選びとり、大きく育てる基礎を築いたのだ。

この本の中に、「医学校で国が指導する薬学には、学がありますが、術が欠けています」という言葉があった。民間、あるいは会社という組織は、この「術」を行うところなのだ。

城山三郎「部長の大晩年」(新潮社)

三菱製紙高砂工場のナンバー3の部長で終えた永田耕衣(1900-97年)は若い時から俳人であった。55歳で定年を迎え、毎日が日曜日の40年以上に及ぶ「晩年」の時間を俳句や書にたっぷり注ぎ、そして97歳で大往生する。城山三郎の傑作「毎日

が日曜日」を豊かに生きた人物の伝記小説だ。

この人は芸術や宗教に徹した人々と深く付き合い、評価される創作活動に励む。一方会社員としてはハンディキャップを背負いながらかなりの昇進を果たし、1955年の定年までつとめあげている。二つの世界が共存し、大いなる晩年に向かって人物が大きくなっていく。

日常の生活ぶり。

句作とエッセイや評論の執筆。主宰する俳句誌の編集。東西の哲学、宗教、文学の読書。書画の制作と収集。骨董と古物の収集と観賞。謡曲と、能の観賞。美術展、美術館めぐり。

- ・ 大したことは、一身の晩年をいかに立体的に充実して生きつらぬくかということだけである。一切のムダを排除し、秀れた人物に接し、秀れた書を読み、秀れた芸術を教えられ、かつ発見してゆく以外、充実の道はない
- ・ 老いて新しく得られるもの、加わるものが、いくつもある
- ・ かつて読んだ内容を別の新しい本で読むのは、復び新鮮無類な泉に口づける感が深い
- ・ 人間であることが職業なんや
- ・ 出会いは絶景
- ・ よいものをよいと見る眼を不断に養わねばならぬ
- ・ 俳句の「深作」は仕事への熱中から来る
- ・ 常識を破るのが詩なんや
- ・ 俳句は奇襲の文芸です
- ・ 亜晩年、重晩年、秘晩年、露晩年、和晩年、是晩年、呂晩年、綾晩年、些晩年（造語）
- ・ 旭寿(九に〇、その〇の中に、一をはめこむと「旭」になる)数えで 91 歳。

「朝顔に百たび問はば母死なむ」

「衰老は水のごと来る夏の海」

「無花果を盛る老妻を一廻り」

「コーヒー店永遠に在り秋の月」

「秋雪やいづこ行きても在らぬ人」

「強秋や我に残んの一死在り」

「白梅や天没地没虚空没」

「枯草や住居無くんば命熱し」

「死神と逢う嬉しさも杜若」

永田耕衣の晩年は、大いなる晩年であった。

解説の佐高信が、同じ昭和2年生まれ作家が書いた俳人の伝記小説をあげている。藤沢周平の「一茶」、吉村昭の「海も暮れきる」(尾崎放哉)、この2冊を読んでみよう。

佐高信 「孤高を恐れず—石橋湛山の志」(講談社文庫)

石橋湛山(1884-1973年)という政治家は、総理大臣の椅子を病気によって71日という短い期間で潔く退くという見事な出处進退と、日本の進むべき道として「小日本主義」を唱えたことで知られている。

世界で活躍するためには大日本主義を棄てねばならない。「満州・台湾・朝鮮・樺太等も必要ではないという態度で出づるならば、戦争は絶対に起らない。従って我が国が他国から侵さるるということも決してない」。そして中国、東洋の弱小国全体を道徳的支持者とすることが日本にとっての大きな利益となると説いている。それが「小日本主義」である。

そして湛山の弟子・宇都宮徳馬に師事した田中秀征は、この考え方を「質日本主義」と言い、筆者の佐高信は、「良日本主義」と呼んでいる。

この書は、細川連立政権の誕生と崩壊の直後の情勢の中で、「リベラルとな何か」という問題意識を持って、その体現者たる石橋湛山を追った書物だ。「冴え冴えとした筆致」と国弘正雄評しているのをうなずくことができる。

組織、国歌、イデオロギーから自由であり、人間第一、個人第一の思想がリベラリズムである。

湛山は72歳で総理になり、亡くなる前年に「石橋湛山全集」15巻を完結させ、88歳で大往生した。

- ・ 我が国の総ての禍根は、小欲に囚われていることだ。、
- ・ 無武装の平和日本を実現すると共に、引いては其の功德を世界に及ぼすの大悲願を立てるを要する。、それにはこの際国民に永く怨みを残すが如き記念物はたとい如何に大切なものといえども、これを一掃し去ることが必要であろう。
- ・ 「理論は大貨幣にして実行は小貨幣であり、小貨幣にくずせない理論はニセ札にすぎぬ」(田中王堂)
- ・ 勢力を集中するまでには十分意見を戦わして間違いのない方針を定めねばならぬ。
- ・ 日本には、主義として一つも小日本主義を標榜する政党がない。この点に於いて日本は実に挙国一致である。
- ・ 元号廃止、西紀使用を主張したい。、我が国民はどれ程の不便を嘗めているか。、煩わしさは馬鹿馬鹿しき限りだ。
- ・ 「吉田総裁という偉大にしてならびなき大総裁の後を襲うことを思うとき、慄然と

して身の引き締まるを覚えざるを得ない」(緒方竹虎自由党総裁)

- ・ 国民諸君、私は諸君を楽にすることはできない。もう一汗かいてもらわねばならない。湛山の政治に安楽を期待してもらっては困る。
- ・ 君、何ごととも運命だよ

吉村昭「冬の鷹」(新潮新書)

「解体新書」成立の過程を吉村昭らしい克明な調査で再現した労作。

主人公は豊前中津藩の藩医・前野良沢。もう1人は杉田玄白。そして平賀源内と高山彦九郎が脇役として登場する。

ターヘル・アナトミアという蘭書の翻訳という医学史上の偉業を、盟主として実現した前野良沢の名前は、「解体新書」の譯者にはない。その謎が解き明かされる伝記である。

この本を読みながら思ったのは、それぞれの性格にふさわしい人生を送ったのだということだ。かたくなに主義にこだわる良沢、たくみにプロジェクトを実現させていく10歳下の玄白、そして華やかな才能を使いつぶす源内、政権の朝廷への返上を画策する行動力を示す彦九郎。性格タイプのエニアグラムでみると、良沢は観察者、玄白は成功を目指す人、源内は冒険者とみえる。背負った性格というOSにのっかって生きているのだ。

ターヘル・アナトミアの翻訳事業は難行だった。蘭語で書かれた文章には手も足も出ない。櫓も舵もない船で大海に乗り出したのだ。この突破口は、人体の図の中にある単語を本文の中を探して、そこから類推して意味を探るというやり方だった。そして2年の歳月を費やして翻訳は完成する。中国医学の五臓六腑説を粉砕する革命的な所業だった。

源内は52歳で病死。玄白85歳での長寿での穏やかな死。良沢は81歳で娘の嫁ぎ先で死。彦九郎は追いつめられて自刃。

良沢「人の死は、その人間がどのように生きたかをしめす結果だ。どのように死をむかえたかをみれば、その人間の生き方もわかる」

吉村昭の妻で同じく作家の津村節子は、吉村の死後、著書を読み始めて吉村昭という作家のファンになっている。

吉村はあとがきで、4年間の執筆準備の後、月刊エコノミストに1年7か月にわたる連載小説として書いたと記している。中津でも取材をしていて、市立小畑記念図書館や、郷土史家嶋道夫先生の名前もある。

吉村昭の本は、「三陸大津波」を読んだことがある。すっかりファンになったので、「戦艦武蔵」「高熱隧道」「神々の沈黙」などを読んでみたい。

城山三郎「無所属の時間で生きる」(新潮文庫)

この作家のエッセイの中に出てくる作家の名前を拾ってみる。

吉村昭、高杉良、佐高信。私によく読む作家たちだ。中津の松下竜一の名前もある。

この作家の本は随分と読んだが、エッセイもいい。

- ・ サトウサンペイ「三日続けて仕事をしないと、頭の配線図が消えてしまう」
- ・ 丸田芳郎「会社の仕事とは別に何か研究なり勉強を生涯持ち続けるようにすること。電話で済まらず必ず手紙を書くようにすること」
- ・ 五島昇「経営とは世の中の役にたって、儲けることだ」
- ・ 伊達正宗「残軀楽しまざるべけんや」
- ・ 城山三郎「一日一快」

2013年5月

吉村昭「ポーツマスの旗」—外相・小村寿太郎」(新潮文庫)

日本の命運を賭けた日露戦争は、陸軍の旅順陥落と海軍の日本海海戦の大勝利となった。しかしその時点で日本は兵力と財力は力尽きてしまっていた。

政府は機会をとらえ、アメリカの斡旋を得て、ポーツマスで講和会議を開く。その全権を引き受けたのは外相・小村寿太郎である。条約締結は難題であった。

ロシアの全権は老練な政治家・ウイッテで、小村はこのウイッテと息詰まる交渉を展開する。日本政府の各国政府からの情報収集、ルーズベルト大統領との友人関係にあった金子の動き、ロシア側の革命前夜の国内情勢、などを総合しなら、小村は冷静沈着に相手と対峙し、最終的に交渉を妥結させる。

しかし日本の財政と兵力の実情を知らぬ日本国民は樺太北部と賠償金の放棄を知り憤激し大暴動に発展する。小村は帰国後暗殺の恐れの中で天皇陛下に奏上。

短軀(1m43c)、病弱、崩壊した家庭、父の負債からくる驚きべき貧乏、小藩の出身、などのあらゆるハンディを背負った小村は、47歳で大抜擢を受けて、桂内閣の外相として入閣し、日露交渉にあたる。

すぐれた頭脳、強靱な神経、大胆で周到な実行力を持った小村は世界各国に情報網、諜報網を張り巡らせる。決断力、忍耐力、周到な配慮と慎重さ、、、。

ウイッテの5つの方針が記されている。アメリカを強く意識している。

講和を望んでいるという態度は決してみせない。僻地の戦争であるという態度で日本を威圧する。記者たちに愛想をよく接する。気さくな態度。ユダヤ人の反感を招かない。

小村は、歴史の浅い日本としては愚直な誠実さを基本方針として貫いている。

小村は常に議事進行の主導権を握るために、会議の冒頭に提案をしている。

協議が成立したとき、ウイッテは顔に喜びをあふれさせたが、日本側は泰然自若としていた。小村は「私は、自分の責任を果たしたことに満足している」と答えている。

粕谷一希から「外科医の執刀」「異常とも思える徹底した調査癖」と評された吉村の筆さばきの揺るぎの無さは見事である。

ポーツマスでは会議場を見学し、図書館や新聞社で資料を集めている。また日本では、外務省外交史料館に通うと同時に随員の遺族関係者に会い日記を探している。

この作品と対をなす日本海海戦を書いた「海の史劇」と、「ウイッテ伯回想記」(上)を読みたい。

宮崎県日南市飫肥にある記念館も訪問したい。

ティモシー・ライバック「ヒトラーの秘密図書館」(赤根洋子訳・文芸春秋)

ヒトラーの蔵書、読書という視点から、ヒトラー誕生の秘密と思想の源を探った労著である。

フリードリヒ大王の模範。世界の首都たるベルリン。スウェーデンの探検家ヘディンの冒険物語。1万6千冊の蔵書、7千冊が軍事。毎日1冊以上の読書。フォード賛美。無学な男。出典を明らかにしない思想開陳。ドイツ経済の崩壊とともに首相になる。優越人種と劣等人種。アメリカ賛美。人種的・優生学的に浄化された世界を目指す勇氣。百科事典をひく習慣。タルムードの鍛錬という鉄工所で鍛え上げられてきたユダヤ人は真のドイツ人にはならない。血と魂の腐敗。抜群の記憶力。共産主義はキリスト教の私生児だ、どちらもユダヤ人の副産物。ドイツは血と土によって統一された民族国家だ。ポーランドの絶滅。

佐藤剛「上を向いて歩こう」(岩波書店)

孫崎享「戦後史の正体」(創元社)

この本のことを書いた私の書評。

日本の戦後の外交には、対米追従と自主独立の二つの路線の相克が続いている。

米国の日本支配の実態について論じるというタブーに挑戦した意欲作だ。

このことを勇氣をもって語るべきは外務省のOBだという認識の下で、著者・孫崎享(元外務省・国際情報局長)はこの本を書いた。

最近の民主党政権の失敗、小沢一郎起訴事件、尖閣や北方領土問題など、この視点で説明されると腑に落ちることが多い。日本の気概の喪失、精神的頹廢は、実根が深いことを思い知らされる。

この本は 8 月 10 日の出版で、創元社の「戦後再発見」双書の第一弾だ。今から話題になるのは間違いない。

松本重治「上海時代—ジャーナリストの回想(上)」(中央公論社)

満州事変後の排日・抗日の嵐の中でジャーナリストとして上海に赴任した松本重治(1899-1989年)は6年間(1932-1938年)にわたって日中関係をテーマに仕事をする。内外の政治家、外交官、財界人、ジャーナリストとの多彩な交友を重ね、日中関係の正常化と平和の実現に尽力する。全3巻の上巻。当時の中国の指導者はほとんどが日本留学の経験者だったのには驚く。

東大を出たが官禄を食むことはしたくない、会社や銀行にも入りたくないと言っただけで、アメリカに留学をする。そこで漠然と「国際的ジャーナリスト」になりたいという希望と、アメリカと中国について関心を抱くようになる。1929年の京都での太平洋会議のセクレタリーとして参加。その後、この会議の延長線上に、多くの「奇縁」とともに人生が展開していく。

- ・ 日米関係の核心的問題は中国問題である。日米関係は日中関係である。
- ・ センス・オブ・プロポーション。大きいことと小さいことを識別する能力。グラス・オブ・シングス。物事や問題の核心を把握すること。まず先立って自らの国民文化を深く研究しなければならない。真に国を愛するものにして初めて、真に世界にその目を開き得るからである。」(新渡戸稲造)
- ・ 取材三原則:ギブ・アンド・テイク。最も大切なのは信用。ニュースをクリエイトする。
- ・ 日本の事情の大綱を十分ぐらいで説明し得る能力を養う
- ・ 表面は抗日、裏面は反蒋介石
- ・ 一流の人間はみんなそうだが、、、恰好をつけるような気配は微塵もなく、一見旧知のような話しぶりだったが、「さすがに物腰は礼儀正しいものであった。
- ・ 日中関係を大切にするためには、第三国との関係、とくに日英関係を忘れてはならぬ。
- ・ 中国の問題は、騒がずあわてず、落ち着いてやることだ。これのみが両国を本当に力強く結びつける方法である(有吉中国大使)

内外の主要な人々が松本重治のまわりを巡る。どの人も国益を念頭に置いて国際関係を考え仕事をしていく。立派な日本人と立派な中国人が織りなす絵柄としての歴

史は大変に興味深い。日中戦争前後の事情と雰囲気がよくわかる。

中巻・下巻も読みたい。梁啓超という人物を調べること。

松本重治は館長を務めていた六本木の国際文化会館を改めて訪問したい。日航時代はこの会館には縁があってよく訪れていたが、ここを舞台に国際関係の歴史がつくられていったのだ。

玉村豊男 「晴耕雨読ときどきワイン」(中央公論新社)「隠居志願」(東京書籍)「今日よりよい明日はない」(集英社)「作家の胃袋」(祥伝社)

箱根のライフアートミュージアムで買った玉村豊男さんの本を数冊読了した。

1945年東京生まれ。東大仏文科卒業。在学中にパリ大学言語研究所に留学し、欧州各地を周遊。1970年に帰国。テレビ局に内定するも内定者合宿で向いていないと辞退。その後、国内旅行ガイド、海外旅行コンダクター、通訳、翻訳業などを経て、1972年より文筆業。1983年長野県軽井沢に移住、42歳の年に吐血し輸血でC型肝炎をもらう。1991年には同じく東御市に移住し農園を開拓。2003年ワイナリーを設立。2007年には元箱根に玉村豊男ライフアートミュージアムを開設。

- ・ 軽井沢は5月の中旬から6月の梅雨入りまでの約一か月のあいだが、一年のうちでもっとも美しい季節である。
- ・ ノンアルコールビールの登場で、酒のない食卓が淋しくなくなった。週の半分の飲酒日にはおいしいワインを楽しむ。
- ・ 65歳から始めた筋トレ(ダンベル・マシン)で少しずつ体型が変わってきた。
- ・ アトリエで、日のあるうちは絵を描き、夕方になったら筋トレをやり、夜はダーツで過ごす。
- ・ 他人に依存しない人生を送りたいと、若い頃からそう考えていた。
- ・ つねに前向きに毎日過ごす心構えで、上質なヴィンテージワインのように、年を経るにしたがって熟成していかねばなりません。
- ・ 本を書く約束も1年単位で考えるようになりました。溜まった執筆の約束が向こう2年分くらいはある。
- ・ いちばん危険なのは、ライフワークをもつことです
- ・ 文章を書くこと、絵を描くこと、ワイナリーを経営すること。
- ・ 好き勝手にやってきたが案外慎重だった。左足に全体重を移しても大丈夫か完全に確認できるまでは右脚を地面から離さないでやってきた。
- ・ 病気がなかったらもっとヘラヘラした人生を送ってたかもしれない。
- ・ ワインづくりには免許が必要。最低 6000 リットルの生産が必要。膨大な資金が必要。還暦を目前に控えて、私財を投げ打ち借金を重ね会員を募って資金を集めて、ついにワイナリーをつくった。

- ・ 僕の一番好きなシーンっていうのが、料理や酒を並べて、みんなでバカ話をしながら飯を食っている時間。
- ・ 原稿は注文を受けて書く職人仕事。絵は描きたいものを描きたいときに描く、プロではなくアーティスト。

田中正明 「パール判事の日本無罪論」(小学館)

「パール判事の日本無罪論」(田中正明)を一気に読了。

極東国際軍事裁判(東京裁判)において 11 人の判事の中でただ一人全員無罪を主張したインドのパール判事の理念について書かれた書物である。

連合国によって公表を禁止されていたパール判決文の翻訳作業を秘密裏に続けサンフランシスコ平和条約によって日本の主権が回復した日に刊行された大ベストセラー「真理の裁き・パール日本無罪論」が源になっている。1963 年の「パール博士の日本無罪論」を文庫本として 2000 年に文庫本として再刊したものである。

パール判決文は英文 1275 ページ、日本語にして百万語に及ぶ膨大なものである。その概要をまとめてみる。

第 1 部「予備的法律問題」。裁判官の構成が戦勝国のみの判事であり不公正。東京裁判は国際法にのっとっていない。マッカーサーがつくった裁判所条例に基づいての裁判であるが、その条例には法的価値はない。ポツダム宣言の範囲と逸脱した管轄。敗戦国にも主権はある。侵略戦争の定義はない。戦争は犯罪ではない。責任は国家がとるべきであり個人には及ばない。

第 2 部「侵略戦争とは何か」。侵略戦争と自衛戦争の区別は難しい。日中戦争で米英は中立を守らなかった。対日経済制裁によって日本は立ちあがらざるを得なかった。太平洋戦争は日本の一方的侵略ではない。

第 3 部「証拠及び手続に関する規則」。膨大な証拠は公正な手続によって受理されたものではない。証拠として価値あるものではない。

第 4 部「全面的共同謀議」。内閣が何度も(14 度)交代した日本の政情から検察側の共同謀議を全面的に否定し妄想としている。

第 5 部「裁判の管轄権」。ポツダム宣言での戦争には太平洋戦争を指しており、満州事変やノモンハン事件は含まれていない。事後的に管轄権を拡大するのは不法である。

第 6 部「厳密なる意味における戦争犯罪」。被告たちは非道(俘虜の虐待・大量の非戦闘員の殺戮・放火・略奪)を部下に命じた者たちではない。この意味でこの裁判は無効である。トルーマン大統領が投下を命じた原爆こそ、人道の名において裁かれるべきである。

第 7 部「勸告」。東京裁判は復讐であり、占領政策の宣伝効果をねらった政治行為である。このような裁判を行ったことは文明の恥辱である。

後に、関係者や識者が東京裁判を次のように反省と論評している。

- ・ マッカーサー「彼らが戦争に飛び込んでいった動機は、大部分が安全保障の必要に迫られてのことだったのです」(1951 年。米国上院軍事外交合同委員会)
- ・ フーバー大統領「もしわれわれが日本人を挑発しなかったならば決して日本人から攻撃を受ける様なことはなかったであろう。
- ・ ライシャワー「軍事法廷はかく裁いた。だが歴史は、それとは異なる裁きを下すだろうことは明らかである。
- ・ プライス「原告アメリカが、明らかに責任があるからである。ソ連は日ソ中立条約を破って参戦したが、これはスターリンだけの責任でなく、戦後に千島、樺太を譲ることを条件として、日本攻撃を依頼し、これを共同謀議したもので、、、」
- ・ ヤスパーズ「一つの民族だけが、戦争の責罪を負わなければならない義務はないと思う」

東京裁判史観を覆す一書である。

パールの意見書に接し、裁かれた被告が歌を遺している。「ふみ」はパール判決書のこと。

東條英機「百年の 後の世かとぞ 思いしに 今このふみを 眼のあたりに見る」

板垣征四郎「ふたとせに あまるさばきの 庭のうち このひとふみを 見るぞとうとき」

「すぐれたる 人のふみ見て 思うかな やみ夜を照らす ともしびのごと」

木村兵太郎「闇の夜を 照らすひかりの ふみ仰ぎ ころろ安けく 逝くぞうれ志き」

パール判事の一生。

1886 年生れ。3 歳にして父を失い、その後の全修学過程を通じて経済的に苦難の道を歩んだ。19 歳、日本がロシアを破ったことに感動し、インド独立を考えるようになる。数学を専攻し、さらに法科へと進む。会計院に就職する傍ら法律を勉強し法学士となる。この頃ある大学の数学教授として招聘される。1920 年に法学修士、1924 年に法学博士へと進む。1923 年、カルカッタ大学法学部教授、1941 年カルカッタ高等法院判事、1944 年カルカッタ大学総長、1946 年、ネール首相から極東軍事裁判のインド代表に押される。1960 年、インドの再考栄誉勲章を受賞、ジュネーブの国連司法委員会議長、世界連邦カルカッタ協会会長に就任。1967 年逝去。

1966 年、来日時に昭和天皇から勲一等瑞宝章を授与された。

京都東山の霊山護国神社にもパール博士顕彰碑が 1997 年に建立されている。2005 年には靖国神社には終戦 60 周年を記念してパール博士顕彰碑が建立されている。

山口由美「箱根富士屋ホテル物語」(千早書房)

箱根富士屋ホテルは、創業以来今年で 135 年を迎えた。

今では全国に 17(2002 年現在)のホテルをもつリゾートホテルの一大チェーンとなった。

一口に 135 年というが、とても長い時間である。このホテルは 1878 年の創業から国際興業の小佐野賢治の手に渡る 1966 年までの 3 人の優れた経営者によって築かれてきた。その物語を読んだ。山口由美「箱根富士屋ホテル物語」である。筆者の山口由美は創業者山口仙之助の曾孫にあたる。

創業した山口仙之助(1851-1915 年)は、明治時代に外国人向けのホテルを興し日本近代化の一翼を担った。福沢諭吉の影響を受けて新しい産業であるホテル創業に力を注いだ。慶応義塾出身名流列伝によれば「旅館又はホテルとして、岩崎弥之助、古川市兵衛等を謝絶せるもの、富士屋ホテルをおいて他にあらざるべし。主人山口仙之助氏はこれらの名士の来宿を断然謝絶したる好漢にして、金銭の前に頭を下げることを欲せず。剛直一徹の奇士なり」とある。

実質的な二代目・山口正造(1882-1944 年)は、日光の金谷ホテルの次男で仙之助の長女孝子の婿養子であるが、富士屋ホテルを大発展させる。

三代目の山口堅吉は、富士屋を守り未来へと継承することに生涯を捧げた。

3 人の写真を箱根富士屋ホテルのホテルミュージアムで見たが、その時立派な髭を生やした正造という人物に興味を持った。

17 歳の時にアメリカに渡る決心をし、徒手空拳でサンフランシスコ、バンクーバー、ロンドンと移りながら、次第に頭角を現し、ロンドン市内に柔道学校を開校し、名声を得るまでになった。1907 年 8 年に及ぶ外国生活を終えて帰国。25 歳の時に富士屋ホテルに入る。

温室の設置から始まり、富士屋自動車株式会社の設立、房、厨房、冷蔵庫、など近代ホテルとしてのバックアップ部門の地固めを行う。そして「建築道楽」と言われるように個性的な建物を次々と創っていく。正造は一時期だが、ライトが建てた帝国ホテルの支配人をやってもいる。関東大震災による大打撃、妻との離婚を乗り越え、ホテルマンの育成のための富士屋ホテルトレーニングスクールも設置するなど先見の明があった。

野田一夫先生が初代の学科長をつとめた立教大学観光学科は、正造の一周忌を記念して集めた寄付を基に設立されたことも初めて知った。

正造の写真と銅像をみると、まことに立派な髭を蓄えている。60-70センチという記録がある。万国髭倶楽部を思いついて10カ国43名のメンバーが登録した。「お客様に覚えて貰いやすいようにすることが必要だ。その為には、ヒゲは最もよい目標となる」、これも商売の一部だったのだ。

富士ビューホテル、日本で二番目に古い仙石原ゴルフ場なども新しいもの好きの正造の仕事である。

独身であった正造は1944年に脳溢血で61歳の生涯を閉じる。亡くなる3ヵ月前に取締役社長に就任している。それまではずっと専務のままだったのだ。

「司にと祭り上げらる我身にも 秋来にけりと見ゆる今朝かな」。

「僕は30何年かかって、ここに一つの Atmosphere をつくったのである。これは、誰にも真似できない」と語っている。その雰囲気は今なお生きていることを先日の訪問で感じた。

富士屋ホテルは、その後、仙之助の次女貞子の婿養子となった堅吉が継ぐ。堅吉は早稲田を出て日本郵船の外交航路の客船のパーサーだった。敗戦によって進駐軍に接収された後も、発展を続けた。

小出進「世界救世教 岡田茂吉 企画行動力の秘密」(講談社)

「企画行動力の秘密」というタイトルに惹かれて世界救世教の岡田茂吉教祖を描いた本を読了。

岡田茂吉(1882年-1955年)は、世界救世教などの創始者。宗教家にとどまらず、文明評論家、書家、画家、歌人、華道流祖、造園家、建築家、美術品収集家、などの文化人でもある人物。箱根美術館、および現在のMOA美術館の前身となった美術館の開設者。自然農法の創始者。全人類の病貧争からの脱出、すなわち健康の実現、貧苦からの脱出、安全の実現を基礎として、新文明世界(地上天国、理想世界)を創造することを目指した。そのモデルは箱根、熱海、京都。生涯に5500首の短歌、揮毫した画像は7千枚、書は百万枚、論文2千編。

「お光」といって手をかざして浄霊を行う宗教で、奇蹟を起こすらしいが、とにかく物凄いエネルギーを持った人物であることがわかる。熱海のMOA美術館を訪ねたい。

- ・ 人間は信用第一である。信用ほど大きな財産はない。信用財産からは何程でも利子が生まれる、
- ・ 何かを計画する場合、決して焦らない。、準備万端を整え時期を待つのである。
- ・ その時その時に必要なことに徹していけばいいのだ。
- ・ 人を喜ばせるのが好きで、ほとんど道楽のようになっていた。
- ・ 成功の秘訣は、必ず成功しようと意図意力であり、それに伴う努力である。

- ・ 人間万事算盤を忘れては何事も成功は不可能である。
- ・ 奥さんを大事にしない人は出世しないよ。妻の協力を得られないような男では、大した仕事ができる「わけがない。
- ・ だれにでも利用される人間になれ。利他愛に生きよ。

この本では岡田の「企画行動力」に焦点をあてようとしている。そのポイントは以下と分析している。

- ・ 多種多様な人物と接触し、幅広い情報を入試できた。
- ・ 人材発掘の奇才(誠実な人物・努力家)
- ・ 豊富な人脈を有する信徒を抜擢
- ・ 多趣味
- ・ マルチ人間
- ・ 障害に出会うと、徹底的に原因を追究し新たな発見を得る

宮本常一「忘れられた日本人」(岩波書店)

宮本常一(1907-1981年)は、1939年(32歳)以来、73歳で死に至るまで40年以上にわたって日本各地をくまなく歩き、民間の伝承を克明に調査した民俗学者。

伝承者としての老人たちの過ぎしてきた時代と環境を、老人たちの人生とからめて聞き書きという手法で描いた代表作品。

本人は、この本を「紙碑」と言っている。

女たちの生態、村のしきたり、問題の解決の方法、夜這いや夜逃げ、世間師たちの話、など面白い話に満ちている。古老たちの語り口を上手に再現してる。

内容はもちろん面白いが、「あとがき」に自身で調査の方法を明らかにしているのが興味深い。

- ・ 1939年以來、日本全国を見ておきたいと思いつくままに各地を歩いた
- ・ 戦後故郷に帰って百姓になる。農閑期には戦前に世話になった仲間を訪ねて農業技術の伝達をした。あおのかたわら農村調査を行った。
- ・ ある地域をできるだけくわしく、しらみつぶしに見た。歩いて見て人に疑問を尋ねた。一つの部落の成立と存続の様子がわかる。
- ・ 同じ地方へ何回も出ていくことにつとめた。こういう生活が1952年(45歳)まで続く。
- ・ 1955年(48歳)から主として山村の調査に力を注ぐ。学会、調査会、官庁委託、仲間。
 - ・ 目的の村を一通りまわりどういふ村かを見る。
 - ・ 役場で倉庫の中を見せて貰って明治以來の資料を調べる。

- ・ 役場の人に疑問な点を確認する。
- ・ 森林組合、農協を訪ねて調べる。
- ・ 古文書があれば旧家を訪ねて必要なものを書き写す。
- ・ 何戸かの農家を選定して個別調査をする。一軒に半日。
- ・ 疑問点を心の中において、村の古老にあう。疑問から出発し、あとは自由に話してもらう。何を問題にしているかがわかる。
- ・ 主婦や若い者の仲間に会い、多人数の座談会形式で話を聞き、こちらも話す。

一番知りたいことは、今日の文化を築きあげてきた生産者のエネルギーが、どういう人間関係や環境の中から生まれ出てきたかということだ。

宮本常一の所属した渋沢敬三のアチック・ミュージアムは、後に日本常民文化研究所となり、神奈川大学に吸収されて網野善彦(1928-2004年)の活動の場になる。網野は中世の職人や芸能民など、農民以外の非定住の人々である漂泊民の世界を明らかにした。その系統の中に赤坂憲男の東北学もある。その網野は巻末で「解説」を担当している。

「旅する人」宮本常一は民族誌を中心にした柳田国男の民俗学に疑問を持ち、「生活誌」を大事にすべきであり、生活向上のテコになる技術をキメ細かく構造的に見ることが大切だとしている。客観的なデータを整理・分析する民族誌ではなく、民族採集の仕事は「生きた生活」をとらえることにある。実感を通して観察し、総合的にとらえる生活誌を重要視する。

宮本常一は、戦前から高度成長期まで日本各地を対象にフィールドワークを行って、1200軒以上の民家に宿泊して、膨大な記録を残している。

23歳の時に投稿した論文が柳田国男の目にとまる。そして3年後の25歳で生涯の師・渋沢敬三と出会い、4年後の32歳でアスチック・ミュージアムに入り、以後40年にわたって本格的な民族調査に没頭する。53歳で書いた代表作「忘れられた日本人」で脚光を浴びた。

54歳、文学博士号(東洋大)、「日本の離島」で日本エッセイスト・クラブ賞。58歳、武蔵野美大教授。59歳、日本観光文化研究所(現・旅の文化研究所)初代所長。

この人は日本を探検した人だ。

永井荷風著・磯田光一編「摘録 断腸亭日乗」(上) (岩波書店)

墨東奇談などの作者・永井荷風(1879-1959年)は38歳から79歳で亡くなる前日まで、42年間にわたって日記を書き続けている。

胃腸を含め病気の多かった荷風の別号は断腸亭で、日乗は日記のことである。

この42年間には、関東大震災があり、5・15事件があり、2・26事件があり、満州事変、そして太平洋戦争、敗戦、復興の激動期だ。

一行の日もあれば長い文章を書いている日もある。

内容は、豊かな表現で示す天気、事件への感想、女との交情、世相の慨嘆、読書生活、文壇への軽侮、菊池寛への嫌悪感、尊敬していた鷗外のこと、一葉の実力、など多彩で面白い。

荷風は独り身なので、家族は母上以外は登場しない。

春風依然として暖ならず。陰陽定まらず。春風駘蕩。驟雨雷鳴。溽暑甚し。秋雨蕭蕭たり。緑陰清風愛すべし。細雨糠の如し。天気牢晴。凍雲暗澹たり。細雨煙りの如し。、、、。さすがだ。

1923年9月1日の関東大震災以降の叙述は手厳しい。

天地忽鳴動す。、糞尿の臭気堪ふべからず。、帝都荒廢の光景哀れといふも愚かなり。、この度の災禍は実に天罰なりといふべし。、外観をのみ修飾して百年の計をなさざる国家の末路は即かくの如し。自業自得天罰靦面といふべきのみ。

文壇の付き合いを避けた荷風は、手厳しい。

- ・ 悪むべきは菊池寛の如き売文專業の徒のなす所なり。
- ・ 世の文学者といふものは下宿屋とカフェーの外世間を知らず、手紙を書くことも知らず、礼儀を知らず、風流を解せず、薄志弱行、粗放驕慢、まことに人間中の最も劣等なるものなり。
- ・ 芸者や女給などは文士議員らに比較すれば遙かに品格も好く義理人情をも解するものといふべし。、独ろ菊池寛山本有三らをのみ下等なる者と思ひみたりしが、
- ・ 余は日本の文学者を嫌ふこと蛇蝎の如し。
- ・ 余が死後において、余の全集及びその他の著作が中央公論社の如き馬鹿馬鹿しき広告文を出す書店より発行せらるることを恥辱と思ふものなり。
- ・ 世には偽君子多し。己の過去を自ら省み身の恥を知るが如きものは、到底世に立つこと能はざるなり。
- ・ 人生に三樂あり。一に読書、二に好色、三に飲酒。
- ・ 官権万能にして人民の従順なること驚きに堪えたり。
- ・ かつて訳ありし女と一時別れし後再び往来するやうになりて半年一年と月日をふるや、冷静なる交情、さながら親戚の娘または真身の妹と相語るが如き心持となるものなり。

女たちとの交情に関する記述は興味深い。

下巻も注文する。

2013年6月

ビクター・マイヤー＝ショーンベルガー, ケネス・クキエ, 斎藤栄一郎 「ビッグデータの正体」 (講談社)

サブタイトルで「情報の産業革命が世界のすべてを変える」とあるが、その通りだと思った。

著者はオックスフォード大学のインターネット研究所教授でビッグデータ分野の世界的第一人者のショーンベルガーと、英国「エコノミスト」誌のデータエディターのクキエ。

今、起こっているビッグデータとそれを主導するデータサイエンティストについての流れと動きが一望できた。

データサイエンティストは、関係とつながりの発見者ということになる。

この分野でのプロジェクトリーダーとはどのような人だろうか？

どの産業に特定していくのか？

以下、私の問題意識に触れた部分をピックアップ。

- ・ 「小規模ではなしえないことを大きな規模で実行し、新たな知の抽出や価値の創出によって、市場、組織、さらには市民と政府の関係などを変えること」。それがビッグデータである。
- ・ ビッグデータの醍醐味は、個々の情報の関係性をあぶりだす点にある。
- ・ 「量は質さえも凌駕する」
- ・ 因果関係ではなく相関関係
- ・ 埋もれていた「つながり」
- ・ 数年前からは、「データサイエンティスト」なる新しい職業が誕生しているそれは統計学専門家、ソフトウェアプログラマー、インフォグラフィックス(情報の視覚的表現)、デザイナー、さらには語り部として幅広い技能を備えた専門職である。、、データサイエンティストは今後、深刻な人出不足に陥るといふ。
- ・ ビッグデータのパイオニアたちは、活躍の場とは無縁の分野から入ってきた「門外漢」が多い。主にデータ分析、人工知能、数学、統計学といった分野の専門家だ。そのスキルを特定の産業に応用しているのである。
- ・ これからは数学や統計学、それにプログラミングとネットワークのちよとした知識が、「現代の読み書きそろばん」になる。

佐野真一「旅する巨人 宮本常一と渋沢敬三」 (文藝春秋)

佐野真一「旅する巨人 宮本常一と渋沢敬三」を読み終わった。

常民・宮本にも子爵・渋沢にも、そしてこの本を書いた佐野の徹底した取材ぶりにも

感銘を受けた。

取材で訪れた場所の多さ、また「取材協力者一覧」に記された人々の名前の多さ、そして「主要参考文献一覧」に記された文献の数々、。

まさに膨大な調査と徹底したフィールドワークをもとに築きあげられた珠玉の作品である。

1997年に大宅壮一ノンフィクション賞を受賞したのもむべなるかなと思うほど、誠実だが圧倒的な迫力のある作品に仕上がっている。

佐野を含む3人の巨人を意識しながら読み進んだ。民俗学の父・柳田国男は渋沢より21歳年上。渋沢敬三は宮本より11歳年上。

「忘れられた日本人」を書いた民俗学者・宮本常一(1907-1981年)は日本列島のすみずみまで歩き回った。一日あたり40キロ、のべ日数で4000日、そして合計16万キロ(地球4周)の旅をしている。泊めてもらった民家の数は1000軒を超えている。その業績をすべて収録するには100巻を超えねばならないといわれている。

似た人という意味で菅江真澄、伊能忠敬、フーテンの寅、などの名前がこの本に出てくる。この本が出るまでは宮本常一も忘れられた日本人だったのである。

「民宿」「春一番」などの言葉を一般に定着させたのは宮本だった。済民。尋問科学、。

故郷の島を出るとき父親から10箇条のメモをもらう。

「汽車に乗ったら窓から外をよく見よ」「新しく訪ねていったところは必ず高いところへ登って見よ」「人の見のこしたものを観るようにせよ」などの教訓は、宮本のその後の軌跡の基礎となった。

「伊能忠敬みたいだね」「民衆の生活という大地を旅する生涯の旅人」「あれほど生徒から慕われた先生はみたことがない」「無名の大学者」「宮本は仁者だ」「土と海のおいがする顔」「そそのかしの天才」

宮本常一。67年の生涯。余命2か月の宣告を受けても病床で1千枚の対策に挑もうとしていた。

- ・ やっぱり人は生涯に一つの事だけしか本当はやりとげられないもののございます。
- ・ 話し手の前にノートをひろげては相手に絶対本当のことを語ってはくれず、ましてテープに録音するなど論外、
- ・ 樹をみる。いかに大きな幹であっても、枝葉がそれを支えている。その枝葉を忘れて、幹を論じてはいけない。その枝葉のなかに大切なものがある。学問や研究はあくまで民衆や庶民の生活を土台に築き上げるものだ。
- ・ 数多くの事実の積みあげのなかから、最小限いえることだけを引きだしていこうとする宮本のような立場、。
- ・ 地域に博物館をつくることは、眠っている地域のコレクションを立ちあがらせるこ

とにつながる、、、。

- ・ 先生は講演の前にその村も周辺を必ず回る。それだけでその村の歴史と特徴をつかみ、それを講演でズバッと切り出す。
- ・ 自然は寂しい。しかし人間の手が加わるとあたたかくなる。
- ・ 人生はより道や道草が大事じゃ。
- ・ 宮本さんほど恐ろしい人をワシは知らん(司馬遼太郎)
- ・ 俺は決死の思いで仕事している
- ・ 部落問題でも離島問題でも一番大切なことは、地域に人間をつくることじゃ。

歴史というタテ軸と、移動というヨコ軸を交差させながら、日本列島に生きた人々を丸ごととらえようとした。その視点のダイナミズムとスケールが大きい。

渋沢敬三: 渋沢栄一の孫。日銀総裁。大蔵大臣。アチック研究所設立。全 68 巻の「渋沢栄一伝記資料」を 30 年かけて完成。52 年間で 480 回もの旅。学問のパトロン。民族学博物館の最終ランナーが梅棹忠夫。

- ・ 大事なことは主流にならぬことだ。傍流でよく状況をみていくことだ。
- ・ 民具を研究するのではない。民具で研究するのだ。
- ・ 銀行の仕事は一度も面白いと思っただことがない
- ・ 昭和 39 年以来相撲を見たことがない。、、ベースボール・マッチを見たことがない。ゴルフは行かぬ。碁、将棋はしない。マージャンは 1 つぺんもやらない。時間は浮いてくる。
- ・ をつづけている。
- ・ フォークロア(民俗学)とエスノロジー(民族学)は車の両輪で、二つ同時にやるべきだ。日本文化を研究するには周辺民族の文化を知らないと、。。
- ・ ニコニコしながら没落していけばいい。いざとなったら元の深谷の百姓に戻ればいい

旅。

- ・ 周防大島
- ・ 対馬。
- ・ アチック研究所、日本常民文化研究所、神奈川大学(網野善彦)。

丹羽宇一郎「北京烈日」(文藝春秋)

伊藤忠商事の社長・会長として業績を急回復させ、その後政府の経済諮問会議メンバーや地方分権改革推進委員会委員長をつとめた。2010年6月から2012年12月まで中国大使。

尖閣で揺れた中国外交の現場責任者の報告は聞くに値する。

- ・ 尖閣問題。領有権は日本にあるが、外交上の係争は存在する。
- ・ 原子力技術は放擲出来ない。人と技術を育てるべきだ。
- ・ ブルーカラーの教育程度が日本経済の帰趨を決める。
- ・ まず人間としての教育から始めること
- ・ 利益の根源に迫れ
- ・ 20年続いたから、そろそろ中国の成長も終わり。5-6%。
- ・ 日本は「質」の世界で
- ・ 2013年度国家予算で中国は教育・社会保障・食糧・公共事業の民生4部門に47%を支出。
- ・ 台湾の企業と組んで中国に進出
- ・ 中国は後数年でストライキが頻発する
- ・ 大学は成績の悪い者は落とす。企業に入ってから働きながら学べる環境を整備する。一種の高等教育。
- ・ 中国共産党の正当性が希薄に
- ・ フェイスツーフェイスで永く付き合えば日中関係は必ずよくなる-
- ・ 日米中の三角形を確固たるものにする。それも正三角形にしないとイケない。
- ・ 人は仕事で磨かれ、読書で磨かれ、最後は人で磨かれる。この三部作。

林真理子「林真理子の名作読本」(文藝春秋)

林真理子の本はまともには読んだことはない。

たまたま手元にあった「林真理子の名作読本」(文芸春秋)を読んでみた。

東西の54冊の名作とそれを書いた作家を論評するという代物で、面白く読みふけてしまった。

一冊について原稿用紙5-6枚のクリアでの連載をまとめたものだが、この作家が女性に人気が高い理由がよくわかった。目線は高いが、読者の女性と同じ女性としての作家や主人公への深い視点が共感を呼ぶのであろう。こういうエッセイ的な文章は本音がでる。

女性の生き方、年の取り方に関する考え方や智慧が記されており、同じ職業を営む作家に対する尊敬と共感と同情、そして深い人間観察もあり、読みながら確かな手ごたえを感じる本だ。

「生きていることが芸術」だった白洲正子。「古きよき時代のつつましく美しい日本人」を描いた池波正太郎。本物の自由と孤独をじんわりと味わう幸福をしっていた林芙美子。「隠れ技の天才」向田邦子、、、。

林芙美子「放浪記」を論じた冒頭は「昔も今も、日本の男というのは、野心的な女が嫌いである。」との断定から始まる。宮尾登美子「權」では「宮尾登美子氏の本を、あな

たがまだ読んでいないとしたら、それはとても不幸なことである」も同様だ。「宮部みゆきは松本清張の長女である」。

この人の文章にはあいまいな物言いはなく、「のだ」「である」などの文末が多い。この断定が読者を魅了している。断定される快樂である。

三島由紀夫「鏡子の家」などでは「これはまさしく私のことではないか」と驚きを示す。小説の愉しみには、自分では表現できない感情や本音を代わりに表現してくれ嬉しくなることがある。林真理子のこういう感情は、彼女の愛読者の感情でもあるだろう。

ここにあげた本は林真理子が好きな本である。なぜ好きかというところを見ていくと、「静けさに終始」「静謐を保ち」「清潔」「ピュアなもの」という言葉が目につく。表面的な風俗や事件を描きながら、冷徹で静かな作品が好みようだ。

小説の登場人物には、読者の自分が投影される。平穏な人生を歩む自分のなかにある性的、金銭的な危険さ、危うさをさぐりながら読んでいるのだ。読者は共感しながら疑似体験をしている。

以下、私にも参考になったところ。

フィクションは作家で選ぶのに対し、ノンフィクションはテーマで選ぶのが正しいそうだ。そしてノンフィクションでもあるルポルタージュの肝は比喻にあるとする。比喻こそは作家の価値を高めるキーワードでもある。

「見たことや体験したことをだらだらと書くことは、誰にも出来る。桐島(洋子)さんの凄さは、自分の見たものを分析し、それを実に的確な言葉で組み立て直すところにあるのだ」は、心したい言葉だ。

「作家というのは書き続けることによってしか、過去の栄光の重圧に耐えるすべはないのだ」と言い、しだいにずぶとい神経ができあがっていく。それが「成功の咀嚼」の方法である。

そういえば、JAL時代に林真理子への取材のために、ご自宅にうかがったことがあることを思い出した。

百田尚樹「夢を売る男」(太田出版)

今年の本屋大賞で「海賊と呼ばれた男」が受賞した百田尚樹(1956年生)の最新作「夢を売る男」(太田出版)を読了。放送作家あがりの百田は一作ごとにまったく異なるジャンルの作品を書く。異色作家である。

詐欺まがいの出版ビジネスの際どさを描いた作品である。気楽に読み始めたのだが、後半になるにつれて畳み込むような面白さが湧いてくる。

著者と出版社が費用を折半する「ジョイント・プレス」というインチキなシステムを商売にする男の物語だ。

そのエサが自社の「賞」で、ここで惜しくも賞を逃したと思わせ、200万ほどの自己負

担をさせて本をつくるという仕組みになっている。団塊世代、フリーター、主婦、など本の出版を夢見る人間を食い物にするビジネスだ。

ここには出版というビジネスモデルの崩壊現象、この業界で働く編集者の偽善、プライドの高い愚物の多い作家と言われる人たちの貧相な生態、月刊小説誌の情けない内幕、小説を読む人の絶滅危惧種化現象、など出版ビジネスの実態がこれでもかというくらい登場する。

主人公の牛河原によれば、このビジネスはお金を出させて自尊心と優越感を満たし相手から感謝される商売であり、人を救い、カウンセリング機能をも持っている。

牛河原は物事の本質をずばりと断定するのだが、こういった商売が成立するようになったのは、ブログの隆盛という時代背景があるという。ブログで日本人は書くことの喜びを覚えたのだ。ブログを毎日更新するような表現の喜びを覚えた人間、つまり自己顕示欲の強い人間は最高のカモになる。

作家と一緒に読者も年を取っていく。その悪循環から逃れるには常に新しい読者を開拓すればよい。若い読者をつかむ作品を出し続けることが作家の生き残りの条件になる。その通りだろう。

「元テレビ屋の百田何某みたいに、毎日、全然違うメニューを出すような作家も問題だがな」「まあ、直に消える作家だ」という場面が出てきて驚いた。自分を自著でからかっているという構図だ。

牛河原は「書評家や文学かぶれの編集者が言う文学的な文章とは、実は比喻のことなんだ」と喝破する。昨日書いた林真理子が「比喻とアフォーリズム」と語っていたが、その通りではないか。

悪徳ビジネスといえる出版だが、最後のシーンで「うちも出版社だ。編集者が本当にいい原稿だと心から信じるものなら、出す。そして出す限りは必ず売る！」と大河原は言う。この矜持のこもった言葉を聞いて読者は安堵する。

最後のドンデン返しは、ミステリーのようなのだ。

「3 作続けて重版にならなかつたら、潔く筆を折る覚悟」の百田尚樹の作品は注目だ。

イケダハヤト「旗を立てて生きる」(晶文社)

イケダ自身は「ブログの運営」と「NPOのソーシャルメディア活用支援」という旗を立てている。

以下の抜き書きを読むとわかるように、「旗を立てる」とは、志を立てるということと同義である。イケダはハチロク世代(1986年生れ)の旗手であるが、私の考えと共振する部分が多い。また、随所にソーシャルメディアを使った新しい動きが紹介されており、とても参考になる。

- ・ 社会の課題を見つけたら、そこに旗を立てろ！新しい仕事はそこから始まる。「ハチロク世代」の働き方マニフェスト。
- ・ 問題意識をもったうえで、テクノロジーを用いてそれを発信し、仲間を集め、自分のキャリアをつくっていく（「旗を立てる」型キャリア）という実験的な生き方、。
- ・ 「自分が本来負うべきではない責任」を引き取る人たちが数十万単位で増え、ゲリラ的に活動していけば、世ののなかは間違いなく良くなっていくでしょう。
- ・ 問題の解決策を考えると、テクノロジーの観点はいまや「必須」、。
- ・ 問題意識というのは「怒り」そのものでもあります。

寺島実郎 「何のために働くのかー自分を創る生き方」(文藝春秋)

大学生を含めた若い世代にぜひ読んでほしい本だ。

企業に勤めながら、仕事を通じて時代と格闘し、成長を続けてきた男の物語である。寺島さんは卒業時に、アカデミズム、ジャーナリズム、産業現場という 3 つの選択肢を考えたのだが、数十年経ってみると産学官とジャーナリズムの仕事をするという現在の場にたどり着いている。原点に回帰したという以上に、関心と興味を持ち続け結果的に 3 つの選択肢のすべてを実現しているということもできる。

1980 年からの 7 年間に及ぶ寺島さんの「失語症」の時代に私は出会っている。

中央公論の「われら戦後世代の坂の上の雲」で名前は知っていた。ニューヨークとワシントン時代には現地に何度も訪ねたし、帰国の度に東京で何度も会っている。その間がメディアへの論文や著作を出さなかった「失語症」の時代だったのは初めて知った。「われら戦後世代の坂の上の雲」から「地球儀を手に考えるアメリカ」までの期間である。海外での知見を深めるうちに、自分でわかったつもりでいたが、まったくわかっていなかったことに気づく。半知半解の自分に気づき沈潜する時代だ。この期間、大きな時代の波に飲み込まれ格闘する中から寺島さんは失語症状態を脱していく。

私の場合は、全共闘運動が吹きすさぶキャンパスのなかで大学 1 年生の後半に失語症にかかりそこから脱出するのに 1 年以上かかっている。自分の言葉がないことに気づいて次第にものがしゃべれなくなっていった。受け売りの知識でつまった頭でっかち状態から脱するために、自分に欠けていた行動力を自覚して、激しく「行動」する中から光を見つけようと決心する。そしてその舞台を探検部に設定する。1 年間の怒濤の行動の時代を経てようやく自分の言葉を語れるようになっていく。

この本のキーワードを以下にあげていく。

- ・ 寺島の自分史から。
「マザコン」「読んだこと、感じたことがにじみ出るような文章を書き、それを人に読んでもらうこと」「短歌」「自分の書いた文章で、人の心をつかまえたり、人の気持ちを動かしたりする。そういうことに自分が向いているのではないか」「三つの

選択肢。アカデミズム、ジャーナリズム、産業現場」「マージナルマン(境界人)」「中央公論の粕谷一希」「1980年のわれら戦後世代の坂の上の雲」「折り合い」「2か月で辞表、大原寛」「IJPC(イラン・ジャパン石油化学)」問題解決のために情報を集める」「1980年以降7年間の失語症時代」「NYC、WAS」「問題解決をしてきたことが誇り」「知的三角測量」「知的インフラとしての人的ネットワーク」「サムライ・イングリッシュ」

- ・ 働く意味
「カセギとツトメ」「不条理の克服」「歴史の進歩」「天命」「天職」「まっとうな大人」「教育が残る」「使命感の自覚」「一点の素心」「こだわり」「小成」「謙虚」「出会いと自覚」「時代認識」「6つのジャンル:環境、新エネルギー。医療・介護・健康。次世代ICT。食と農業。グローバルサービス、エンターテインメント、観光、文化交流。新しい公共、NPO、NGO」「企業モノ小説」「自分のネットワーク」「親というハードル」「新渡戸の武士道と内村の後世への最大遺物」「高尚なる生涯」「歴史における個人の役割は重い」「個人・組織・国家」「アーティスト・オブ・ライフ」「ワークウェア(能動的福祉)社会の地平」
- ・ メガトレンド
「グローバル化と全員参加型秩序」「アジアダイナミズムとネットワーク型の世界観」「IT革命の本質」「食と農業の未来」「技術と産業の創生とTPP問題」「エネルギー・パラダイムの転換」

佐高信「友好の井戸を掘った人たち」(岩波書店)

対米と対中を両立しようとした保守政治家の系譜をたどった力作。

1995年の村山談話を初めて読んだ。この談話は受け継ぐべき考え方だと思う。

- ・ 「保利書簡」の保利茂。
 - ・ 後藤田正晴「日本は腹背に敵を作ってはいけない」
- ・ 「友好の井戸を掘った」松村謙三
 - ・ 「寝ていて人を起こすな」
- ・ 小日本主義「石橋湛山」
 - ・ 田中王堂「理論は大貨幣にして実行は小貨幣であり、小貨幣にくずせない理論はニセ札にすぎぬ」
 - ・ 我が国民が、世界を我が国土として活躍するためには、即ち大日本主義を棄てねばならぬ」
- ・ クリーン三木武夫
- ・ 人間掌握の田中角栄
- ・ 田中フメ「貸した金は忘れなさい。借りた金は絶対に忘れるナ」

- ・ 哲人・大平正芳
 - ・ 現在は、未来と過去の緊張したバランスのなかにあるべきで、革命であっても困るし、反動であってもいけない。未来と過去が緊張したバランスのなかにあるよう努めていくのが「健全な保守」というものではなかろうか」
- ・ 会津つば・伊東正義
 - ・ 辞表というものは、出したり引っ込めたりする「ものではない」
- ・ 「村山談話」の村山富市。1995年8月15日。談話の結びの部分。
 - ・ 「わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。私は、未来に過ち無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からのお詫びの気持ちを表明いたします。敗戦の日から五十周年を迎えた今日、わが国は、深い反省に立ち、独善的なナショナリズムを排し、責任ある国際社会の一員として国際協調を促進し、それを通じて、平和の理念と民主主義を押し広めていかねばなりません。同時に、わが国は、唯一の被爆国としての体験を踏まえて、核兵器の究極の廃絶を目指し、核不拡散体制の強化など、国際的な軍縮を積極的に推進していくことが肝要であります。これこそ、過去に対するつぐないとなり、犠牲となられた方の御霊を鎮めるゆえんとなると、私は信じております。「杖るは信に如くは莫し」と申します。この記念すべき時にあたり、信義を施政の根幹とすることを内外に表明し、私の誓いの言葉といたします」

2013年7月

寺田一清「森信三 一日一語」(致知出版社)

本物の日本人の条件「仰ぎ見る師匠の存在」に関わる言葉。

- ・ 天下第一等の師につきてこそ人間の真に生甲斐ありというべし
- ・ 一人の優れた思想家を真に読みぬく事によって、一この見識は出来るものなり。同時に真にその人を選ばば、事すでに半ば成りしというも可ならむ。
- ・ 教育とは人生の生き方のタネ蒔きをすることなり。
- ・ 人はすべからく、終生の師を持つべし。真に卓越せる師をもつ人は、終生道を求めて歩き続ける。その状あたかも、北斗七星を望んで航行する船の如し。

「自分史」

- ・ 人間は何人も自伝を書くべきである。それは二度とないこの世の「生」を恵まれ

た以上、自分が生涯たどった歩みのあらましを、血を伝えた子孫に書きのこす義務があるからである。

- ・ 一眼は遠く歴史の彼方を、そして一眼は却下の実践へ。

森信三は、国民教育者の師父、日本的哲学の継承者、「生き方」教の教祖であると前書きにある。本人は「全一学」と呼んでいる。森信三が尊敬しているのは、中江藤樹、石田梅岩、三浦梅園、慈雲、二宮尊徳。そして西洋ではプロチノスとスノザである。

1896 年生れ。広島高等師範、京都大学哲学科、大学院を卒業。旧満州の建国大学教授、神戸大学教育学部教授。70 歳にして「全集」25 巻の出版刊行に着手。89 歳「続全集」8 巻完結。97 歳逝去。

森信三は日本の高等師範という伝統が生み出した優れた教育者だった。いずれこういう書を書きたいものだ。

北康利「西郷隆盛 命もいらず名もいらず」(WAC)

西郷は五尺五寸(179cm)、体重 29 貫(109 キロ)。「南洲」は自分が流された南の島を意味している。元服の時につけられた諱(いみな)は隆永であったが、明治政府からの辞令には隆盛と間違っていて書かれていた。天皇陛下の名前で書かれた辞令を改めさせるのは不敬であるとし生涯隆盛で通した。

西郷については、多くのエピソード、接した人たちの人物評、敵を「赦す力」などがこの本に書かれているが、本日は西郷の言葉のみを記すことにした。

- ・ そうなら、気張ってやりもんそ！
- ・ 道は天地自然の物にして、人はこれを行うものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふゆえ、我を愛する心を以て人を愛するなり。
- ・ 今は日本全国が雨漏りしている時ごわんあど
- ・ ヒ首一本あれば片づくことではごわんか、
- ・ 事大小となく、正道を踏み至誠を推し、一事の詐謀を用うべからず
- ・ 武士の一言を信ずるのが武士でごわんか。もし反逆したら、また来て討てばよろしい。
- ・ 瓢箪なり
- ・ 恨みは私が引き受けもんそ
- ・ 正道を踏み国をもって斃るるの精神なくば、外国交際は全かるべからず
- ・ しもた！
- ・ おはんらにやった命、おいの身体は差し上げもうそう
- ・ 命もいらず名もいらず、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るもの也。この仕末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得るられぬ也

- ・ 天は人も我も同一に愛し給ふゆえ、我を愛する心を以て人を愛するなり

岡崎武志 「蔵書の苦しみ」 (光文社)

- ・ 谷沢永一の残す本の基準は「超一流の学者の著述」。
- ・ 書齋はスチール本棚 3 本で 500 冊。自分にとってのベスト100というべき愛読書。資料として頻繁に開く本。
- ・ 「佐藤春夫によれば、本の保存委はその値段の 3 杯から 5 倍の費用がかかる」
- ・ iPad はランドセル
自宅の書齋には、過去の愛読書と、未来へ向けての準備書物を置くことにしたい。

堀辰雄 「風立ちぬ」 (Kindle 版)

iPadmini で kindle 版「風立ちぬ」を読了。

昨日のアニメ映画「風立ちぬ」の背景を知ることができた。堀辰夫は詩を散文として表現できる稀有な作家だ。

2013 年 8 月

常見陽平 「自由な働き方をつくる「食えるノマド」の仕事術」 (日本実業出版社)

自由。ライフワークとライスワーク。ノマド。

安藤美冬 「冒険に出よう 未熟でも未完成でも“今の自分”で突き進む。 U25 Survival Manual Series」 (ディスカヴァー・トゥエンティワン)

岡本太郎のあの言葉に感銘を受けたこと、30 歳が転機になったことなど、私と同じだと共感。

石光真人 「ある明治人の記録 会津人柴五郎の遺書」 (中公新書)

「扶清滅洋」を掲げた 1900 年の北清事変(義和団の乱)鎮圧のために英米露仏独など列強 8 カ国は軍を派遣する。6 月 21 日清朝は列強に対する宣戦を布告。北京にいた外国人は籠城を余儀なくされた。2 か月後の 8 月に連合軍は北京を占領し、西太后は光緒帝とともに脱出する。

この籠城にあたって英仏中国語に精通する北京公使館付き武官・柴五郎砲兵中佐

は、実質的な指揮を担い寄り合い所帯をよくまとめ、外国人から多くの賛辞が寄せられた。

この柴五郎が維新時に故郷・会津が朝敵として嘗めた辛酸を描いた少年時代の記録が石光真人「ある明治人の記録—会津人柴五郎の遺言」(中公新書)である。

会津 23 万石は、1870 年に 3 万石に減じられて下北半島に斗南藩として再興を許される。今の青森県むつ市である。恐山のふもとであり、原子力船・むつ (原子力船)の旧母港として知られている。火山灰台地のやせた土地である。

しかし、この最果ての地は気候厳しく実質 7 千石しかなかった。このため移住した会津の人々が嘗めた辛酸は筆舌に尽くし難いものだった。

この間の事情をしたためて眠りにつこうと考えていた文書を、石光が筆者したものである。

肉親の菩提を弔うために書いたもので、自らもこの文書とともに眠りにつこうと考えていた。肉親と自分のために書いた自分史である。この人は立派な顔をしている。

会津の人々の苦難を述べたものであるが、一方で明治の男子のあり方を教えられる新書ともなっている。

- ・ 寒けれども手を懐にせず、暑けれども扇をとらず、はだぬがず。道は目上にゆずれ片寄りて通るべし。門の敷居を踏まず、中央を通るべからず。客あらばぬ奴僕はもちろん、犬猫の類にいたるまで叱ることあるべからず。おくび、くさめ、あくびなどをすべからず、退屈の体をなすべからずと、きびしく訓練されたり。
- ・ 挙藩流罪という史上かつてなき極刑にあらざるか。
- ・ 陸奥湾より吹きつくる北風強く部屋を吹き抜け、炉辺にありても氷点下十度十五度なり。吹きたる粥も石のごとく凍り、これを解かして啜る。
- ・ 官界は薩長土肥四藩の旧藩士に要職を占められて入り込む隙間なし。会津のものにとりては、東京もまた下北の火山灰地に似て不毛の地というべきか、人々日々の生活の業に疲れ、過ぎたること忘れがちなり。
- ・ 中国人は友としてつき合うべき国で、けっして敵に廻してはなりません。

色川大吉「ある昭和史」(中央公論社)

1975 年刊、色川大吉「ある昭和史」(中央公論社)を読み終わった。

「自分史の試み」というサブタイトルがついているように、1925 年生まれの歴史学者が自分の体験とからめながら日本近代史を描こうとした作品である。

「自分史」という言葉はこの書によって初めて登場した。

太平洋戦争では男子 4 人に 1 人が出征。2 世帯に 1 人以上が兵士を送り出した、300 万人の日本人が死んだ。5 世帯に 1 人が死んだ。2000 万人以上の人々が涙にくれた。1500 万人が家を失った。この数字の背後にある庶民の体験をつづった作品だ

が、この当時の人々にはそれぞれのドラマがあった。

著者によれば、歴史とはさまざまな評価や情念や視点を組み合わせながら、同時にそれらを越えてある方向に向かおうとする非情な趨勢を見定めることである。

この本の中では、特に「ある常民の足跡」という章が興味深かった。

1902 年生まれの橋本義夫という東京府下南多摩郡川口村檜原生まれの常民の歴史を描いた作品だ。

橋本家は三多摩壮士の流を汲む川口壮士の家系である。川口村や元八王子村は、自由民権運動がもっともさかんな地方であった。カトリック信仰と結んだ部落解放運動がいち早く起った地域でもあった。それら明治 10 年代の自由民権運動に合流していった。

もともとあった幕府天領であったために差別された土地柄もあり、民権思想に裏打ちされて自由民権運動が人々の心をとらえたのであろう。

「常民」とは何か。農耕、漁業。里人。家の永続。内部の歴史と固有信仰。次代の人に伝える文化的役割。以上がキーワードだ。

内村鑑三の影響。下中弥三郎の農民自治会運動。野呂栄太郎や羽仁五郎を助ける。岩波茂雄に傾倒。

八王子の大きな書店を経営。揺籃社。多摩郷土研究会。多摩自由大学。横山村の万葉歌碑「赤駒を、」の建立。北村透谷碑。麦の碑（「宗兵衛麦」の品種改良家・河井宗兵衛）。おかぼ碑（陸稲品種「平山」の創始者・林丈太郎）。民衆史蹟。近代先覚の碑（部落解放指導者・山上卓樹ら）。絹の道碑（鑓水商人）。コックスの碑。御母讃の碑。多摩丘陵博物館構想。ふだん記の運動（ハガキをうんと書け）。

橋本義夫は伝統の革新的再生者だった。地方に、底辺に、野に、埋もれている優れた師たちを掘り起し、顕彰し、甦らせ、その力を借りて未来を拓こうとした。

現代の常民の見事な祖型は田中正造にある。水俣の石牟礼道子。筑豊の上野英信と森崎和江。東北の真壁仁、むのたけじ、佐藤藤三郎、、、、。

色川は、こうした数千の常民の小リーダーが頑固に頑張り抜いていることを知ってこの国への希望を失ってはいない。

2011 年に東北の道の駅調査をしたとき、駅長さんたちの執念と人柄に敬意を抱いたが、それは色川のいう「常民」のリーダーたちだったと考えると腑に落ちる。これらの人々は人物記念館が建立されるようなトップクラスの人物たちではないが、日本人の原型を保持している人物である。優れた生き方をしている常民のリーダーたちである。

自分史運動、地域起こし、人物の掘りおこし、そして人物教育などが、「常民」というキーワードでつながってきた。

曾野綾子「人間にとって成熟とは何か」(幻冬舎新書)

1931 年生まれ。

クリスチャンの美貌の女性作家は、1995 年から 10 年間、危機に瀕した日本財団の会長をつとめた。

内外に 700 億円の資金を配分する仕事で得た経験が、人を見る眼をより確かにし、この人のエッセイを豊かにしている。

神はいるかもしれないしいないかも知れない。

信仰を持つと自分の行動の評価を他人に委ねなくなる。誉めたり怒ったりする評価者は神しか考えられない。だから人の目をことさら意識することはなくなり、心が平穏になる。信仰がないと、常に人に正当に評価してもらおうとするから毎日が穏やかにならないのではないか。

曾野綾子はこういうことを語っている。これが信仰というものの功德だったのか。よくわかる説明だ。

そして震災でいなくなった家族が生きているという希望をもって毎日を過ごすうち、その希望は祈りに変わっていく。信仰する対象に助けてください、と祈ることができる。

さて、この本では人間の成熟というテーマを扱っている。

成熟していない人というのはどういう人か。

他罰的傾向のある人。定年後にしたいことがない人。人生の雑音から超然としている人。人からの好意を受けるだけの人。論理は正しいがゆるやかに実現するというまみに欠ける人。無思想な人。残りの人生でこれだけはやりたいというものがない人。

成熟している人はどういう人か。

謙虚に満たされた楽しい日々で自然に笑顔がでる暮らしをしている人。責任を引き受ける人。川の流に立つ杭のような人。正義を通すための初歩的な生活の技術という判断のできる人。地理的・時間的空間の中で小さな自分を正当に認識できる人。経済的・時間的に苦労や危険負担をしていて話が面白い人。ものごとを軽く見ることができる人。目立った服装ができる人。

エピソードも面白い。

宇野千代「病気の話をするのはやめにしましょう」。これは参考になる。広めよう。

曾野綾子は、最近「老いの才覚」「人間の基本」「人間関係」「人生の原則」「生きる姿勢」などのタイトルの本を書いている。

こういったことをストレートに書ける女性はなかなかいない。実績と年齢が人を聞く気にさせのさだろう。

飾りもなく、本音で、遠慮なく、人生の機微を語ってくれる人は貴重だ。

次は、岩波ホール支配人だった高野悦子の自伝を読み始めた。

新人物往来社「日本史有名人の晩年」(新人物往来社)

74人の歴史的人物の晩年を追った文庫である。コンビニで売っていた。

エピソードに興味があり軽く読んでみた。

- ・ 新井白石の「折りたく柴の記」は祖父の時代からの回想を交えてた「自分史」。「日記」も興味深い。
- ・ 歌川広重の代表作「江戸名所百景」は60歳から発表を始めた。没年は62歳。
- ・ 杉田玄白の晩年は恵まれていた。その「九幸」は、太平の世、天下の中心で成長、広い交友、長寿。安定した俸禄、貧しくない、名を知られた、子や孫が多い、壮健。
- ・ 貝原益軒は、69歳という老齢期にのんびり夫婦旅をしながら著作活動を続けていた。80歳からの多くの著作のうち「養生訓」が代表作で死ぬ2か月前にも大著をまとめている。
- ・ 頼山陽は大著「日本政記」を完成してその日に死んでいる。
- ・ 陸奥宗光は外相辞任からの1年3か月の晩年に「けんけん録」をまとめた。
- ・ 児玉源太郎はわずか一晩で亡くなった。
- ・ 渋沢栄一は「グランド・オールド・マン」とアメリカ人から呼ばれた。
- ・ 田中正造が亡くなった時に枕元に残されていた頭陀袋には、「新訳聖書」と手帳、拾った小石3個、これが全財産だった。

「折りたく柴の記」「養生訓」「けんけん録」を読みたい。

高野悦子「岩波ホールと<映画の仲間>」(岩波書店)

神保町の岩波ホールという名前と、その総支配人である高野悦子の名前はよく耳にする。

映画の世界で活躍している、というよりも現代を代表する女性という印象がある。

この高野悦子さんは2月9日に亡くなっているが、読み終わった高野悦子著「岩波ホールと『映画の仲間』」(岩波書店)の発行日は2月27日である。そして「あとがき」は2013年1月である。

大腸がんにおかされて余命わずかの日々に、この分厚い本を最後まで書き終えたのである。

この本の幕があがった1968年の最初のページと、そして「あとがき」にもホール開きの日の野上弥生子の「小さなホール」という講演のなかの言葉が紹介されている。

「この小さなホールを、可愛い小さいが、どこにもないような独特の花園に育てあげてもらいたい」という言葉そのままに、迷いなく疾風し、そして実現した人生だったと思う。

この45年間の歩みを年ごとに記録したこの本は、日本映画と世界映画との優れた交

流史になっている。

「受賞・受章歴」として 1971 年以後の賞と章の記録が載っているが、実に 50 に及ぶ賞と章を毎年のように受けていることがわかる。目を引くのはポルトガル、イタリア、フランス、ポーランド、キューバなど外国政府からの褒章が多いことだ。本文で詳細が記されているが、その都度全力で良い仕事をし、多くの同志をつくってきたことが納得できる。また、中国、韓国などアジア国々との交流にも高い意義を感じる。

また、映画、評論、地域。女性、文化、など実に多彩な分野の賞と章の名前がみえるのは、映画を軸に幅の広い活動が多くの人に感銘と影響を与えたからではない。

1981 年の第 10 回森田たまパイオニア賞の受賞理由は、「岩波ホール、そしてエキップ・ド・シネマという芸術的拠点を開創、世界に誇る文化センターとした」である。

同じ年の第 29 回菊池寛賞の受賞理由は、「岩波ホールを拠点として世界の埋もれた名画を上映するエキップ・ド・シネマ運動の主宰者としての努力」であった。

高野悦子は 1929 年満州生まれ。満鉄社員の父と金沢師範で教師をしていた母の三女だ。

日本女子大に入学し、指導教授の南博から与えられた課題「映画の分析調査」を行った縁で映画界に入る。

東宝株式会社文芸部で仕事をする。撮影所に配置転換を願い出るが許可されない。

1958 年、28 歳でパリの映画大学イデックに入学する。最優秀で卒業し、映画監督とプロデューサーの資格を取得する。

帰国後、映画監督になりたかったが、当時の映画界では女性監督は無理で、脚本や演出の道を歩んでいく。

義兄の岩波雄二郎が岩波ホールをつくり、そのホールの総支配人をやらないかと声をかけてくれる。高野悦子 38 歳の時である。

その後、1974 年に、世界の埋もれた名画の発掘・上映運動(エキップ・ド・シネマ)運動を開始する。もう一人の日本映画界の女性の恩人・川喜多かきこと二人で立ち上げた運動である。

「岩波ホールを根拠地に、世界の埋もれた名画を発掘・上映する運動」と定義された運動が、その後の豊かな実りつくりあげていく。エキップというフランス語には、志を同じくする友だち、同志という意味が込められている。

この本のなかで登場する日本映画史上に残る名映画の名前、著名な監督や女性監督、大女優、そして映画界を支えた各界の有力者たちとの交流を時間順に述べてあり、日本映画界を中心に世界中の映画界の歩みも手に取るようにわかる。

歴史のなかではたす個人の役割の大きさを改めて感じる。

エキップ・ド・シネマロードショー作品リストがこの本に載っているのだが、このリストを眺めるだけで、高野悦子の仕事ぶりがわかる内容になっているのが素晴らしい。「積み

重ね」ということの凄みを感じる。

岩波ホールをつくり、支えてきた人たちの仕事ぶりや人柄などを示すエピソードが散りばめれており、納得すると同時に愛情をもってまわりの人と仕事をしていたことに感動をおぼえる。

「よいものはかならずわかってもらえる」

「私の上映作品の選び方は、『心に響く映画』というのが常だった」

「私にはひとつのテーマしかない。『映画の世界で働いている女性』ということである」

「興業という、文化から程遠いところで仕事をしていますが、志だけは高く持ってきました」(文化功労者の受賞式での言葉)

「すべての女性運動は平和運動をもって帰結する」(座右の銘)

この日本映画史を創り上げていく過程で知り合った人々も、時間の経過とともに消えていくが、高野悦子は彼らの仕事を背負って、スピードをゆるめることなく、さらに歩をすすめていく。そしてまた本人が斃れる日がやってくる。これが人間の歴史だ。

女性のロールモデルはなかなかいない。人物記念館のある女性はほとんどが文芸や芸術分野の人である。

現代では、緒方貞子さんと高野悦子さんではないかだろうか。

この人には、師匠、友、仕事量、志、構想力、修養、日本など、私の考える偉人(真・日本人)の条件がすべてあてはまる。

「昔、映画監督を志した者として、映画興行は私の性に合わなかった。岩波ホールの仕事を始めてすぐに胃潰瘍になったのも、嫌なことをしているからだと思った。しかし、私は映画の生みの親ではないが育ての親になることができる。劇場が名画を育てる創造の場であることの発見は、私を大いに勇気づけた。」

これは1985年、創業15周年の年の項に書かれている言葉である。天職を意識した瞬間である。

昨日、岩波ホールを訪ねると、「高野悦子追悼上映」というポスターが掲げてあった。

過去の上映作品から女性監督による名作を3週間連続上映する企画である。10月に上映される。これらの作品は本で詳しく語られているので興味深い。以下の4作品を観ることで高野悦子をしのびたい。

羽田澄子監督の「薄墨の桜」と「早池峰の賦」。スコット監督の「森の中の淑女たち」。トロッタ監督の「ローザ・ルクイセンブルク」。

百田尚樹「幸福な生活」(祥伝社)

百田尚樹「幸福な生活」-- 凄みのあるホラー短編集。

この作家は、毎回まったく作風の異なる作品を上梓し、売れなければすぐに小説をやめるということを公約している。

この覚悟は凄みがある。

この本はホラー短編で、最後の一行でそれまでの流れが一気に覆るといった恐ろしい内容である。

そしてその最後の一行はすべて最後の偶数ページに書かれてある。ページを開くとどんでん返しが起こるといった趣向だ。

母の記憶--「仕方ないから、いっしょに埋めちゃったのよ」

夜の訪問者--「見たな」

そっくりさん--「ひろし！」

おとなしい妻--「あなたの奥さんですよ」

残りもの--「連続婦女暴行殺人犯です」

豹変--「できちゃったの」

生命保険--「あの時のチンピラじゃない！」

痴漢--「何かの間違いで、虎の尾を踏んじまったんだらう」

ブス談義--「私の顔、好きでしょ？」

再会--「今朝、亡くなったらしいよ」

償い--「宇宙人の話って何のこと？」

ビデオレター--「それでは、ごめんあそばせ。

ママの魅力--「伝説の怪物プロレスラーがこんなところに！」

淑女協定--「出張ソープ嬢だよ」

深夜の乗客--「この手口、5年前にも引っかけたよ」

隠れた殺人--「子供のパンツじゃないか」

催眠術--「坊やの催眠術なんかにかかるわけないじゃん」

幸福な生活--「それ以来、ずっと植物状態なんですね」

一見幸福に見える生活に深い裂け目が潜んでいることにぞっとする内容だ。

百田尚樹「海賊と呼ばれた男」(上下巻)(講談社)

百田尚樹「海賊と呼ばれた男」-- 愚痴をやめよ。ただちに建設にかかれ。

出光興産を創業した1885年(明治18年)生まれの出光佐三の95年の激動の人生を描いた小説。

2012年7月に刊行されたこの小説は、本屋大賞を受賞した。

人との出会い(日田重太郎、)、石油という魔物の商品に着目したこと、戦争など激動の歴史の中で翻弄される主人公、何度も訪れる危機で出会う僥倖、アメリカと日本官僚と同業者とのえんえんたる戦い、家族と呼ぶ社員たちの奮闘、企業よりも日本を優先する思想、お世話になった人たちへの義理堅さ、危機に際し原則と方針を明確に指し示すリーダーシップ、禅僧・仙がいの絵との遭遇と蒐集(月は悟り、指は経典)、丁稚奉公の主人や神戸高商校長の影響、、、。

このような人物が日本の石油業界にいたことの幸運を感じずにはられない物語だった。

NHKの「プロジェクトX」を大きなスケールとして実行した男の物語であり、血湧き肉躍る書きっぷりは素晴らしい。

このような真の日本人が様々な分野と業界にいたのだろう。その日本人が礎となって今日の日本がある。

一つの疑問は、こういった男の物語が、なぜ今、受けているのだろうかということだ。

この著者のデビュー作であり、大ベストセラーとなった「永遠の0」も同様なテーマを扱っている。

「日本人」というキーワードが、じわじわと時代に沁み出てきているのではないか。

混迷する時代を生きる指針を真の日本人に求めているのではないだろうか。

そうやって眺めてみると、テレビでは「八重の桜」「半沢直樹」「あまちゃん」などもそういった流れの中にあるように見える。

- ・ 黄金の奴隷たる勿れ
- ・ 愚痴をやめよ。ただちに建設にかかれ。
- ・ 士魂商才
- ・ 自分で工夫して答え見つけることが大切たい。それでこそ、きっちりとした人間になるち思う。
- ・ 誘惑に迷わず、妥協を排し、人間尊重の信念を貫きとおした五十年であった。
- ・ もしかしたら人類は石油など手にしないほうが幸せだったのではないだろうか。

さて、この本の中に神戸高商(現・神戸大学)の初代校長をつとめた水島てつ也に商人としての生き方を学んでいる。水島は中津出身である。今でも中津の金谷に水島公園がある。水島の父・均は豊前中津藩士で福沢諭吉の縁戚にあたる。1864年生まれのでつ也は東京高商を出て横浜正金銀行に入行。38歳で神戸高商の設立を聞き、実業から教育へ転身する。

中津には、慶応義塾の創立者・福沢諭吉(1835年生)、麗澤大学の創立者・広池千九郎(1866年生)、神戸大学の初代校長・水島てつ也(1864年生)と3人の教育者がいる。

中村英利子「漱石と松山」(アトラス出版)

子規と漱石の関係を探った本が興味深かった。

大学予備門、東京帝大で同級生だった。

漱石は松山中学に赴任するが、子規は体を壊し、故郷の松山に戻る。このとき、漱石の借家に転がり込む。一階は子規が占拠し、二階は漱石が住んだ。一階での句会などに漱石も参加する。

また、漱石が熊本の高橋に赴任するときは、途中まで子規も同道している。

二人は親友だった。

漱石は文名において早熟の子規よりも晩成だった。その漱石も50歳そこそこで逝ったから、早熟ともいえる。

この本には、漱石の本音や日常の姿が、本人の口や虚子など他の人の言から見えてきて、面白い。

伊丹十三「女たちよ!」(新潮社)

一世を風靡した名エッセイ「女たちよ!」を読んだが、あらゆることを知っており、そして実際に実行した上で、ゆるやかに断定するという筆致の冴はただ者ではない。冒頭の前書きが凄い。

寿司屋での作法は山口瞳にならった。包丁の持ち方は辻留にならった。俎板への向かい方は築地の田村にならった。パイプ煙草に火をつけるライターのことは白洲春正にならった。物を食べる時に音をたてないことは石川淳。箸の使い方は子母澤寛。刺身とわさびの関係は小林勇。レモンの割り方は福田蘭堂、、、。

「がしかし、これらはすべて人から教わったことばかりだ。私自身は---ほとんどまったく無内容な、空っぽの容れ物にすぎない。」

2013年9月

橋本大也「データサイエンティスト データ分析で会社を動かす知的仕事人」(ソフトバンク新書)

ビッグデータ時代の主役に躍り出てきたデータサイエンティストという仕事がにわか

に注目を集めている。
著者は今話題のビッグデータ分析ベンチャーのデータセクション株式会社を学生時代に起業した人である。

日本におけるビッグデータ時代の曙の様子と、そこをフィールドに新しいジャンルを

切り拓こうとしている人たちの動きがよくわかる構成となっていて、優れた入門書となっている。

特に、実際にビッグデータの最前線で活躍している著者の考える、データサイエンティストに必要な3つの能力が腑に落ちた。

- 1・統計とITの能力
- 2・ビジネスの問題を発見し解決する能力
- 3・創造的な提案を行う能力

この3つの能力を頂点とする三角形の面積の大きい人がデータサイエンティストのイメージだそうだ。

統計とITとマーケティングという言い方よりも、ビジネス寄りのこの定義の方が納得性が高い。

ポイントは「関係」である。

因果関係よりも、相関関係の発見が現場では威力を発揮する。この相関関係を従来大きすぎて無理だった多量のデータを扱いながら発見し提出する新しい職種がデータサイエンティストというわけだ。

個人に関係する広告を最高のタイミングでベストのメディアを通して届ける。ワインの評価を舌ですると同じ結論を事前に提出する。選挙の政党の獲得議席を確度高く推定する。定性データを手軽に分析できる。景気の週ベースでの予測が可能、、、。

各章にインタビューがついている。現場で進行中のビッグデータ革命の息吹がわかる。

ヤフー株式会社事業戦略統括本部データソリューション本部長。

国立情報学研究所コンテンツ科学研究系准教授。

イー・エージェンシー取締役。

ヤフー株式会社執行役員事業戦略統括本部長。

ソフトバンクモバイル株式会社マーケティング・コミュニケーション本部Webコミュニケーション部の部長とWeb企画課長。

「シンプルに考え、ざっくりと答えを出し、もっともらしいものを選びだす」のがデータサイエンティストの思考パターンであると述べているが、これはものごとの本質を見つめる眼を持つてるということで、仕事のできる人の条件と同じだ。

データサイエンティストの3つの能力のうち、2番目の問題解決力はわが学部の方向と同じであり、3番目の「創造的な提案を行う能力」は図解コミュニケーションが貢献できるはずだ。来年度から始まる予定の大学院ビジネスICTコースのデータサイエンティスト養成コースでも私の講義も予定されているが、2番目と3番目、特に3番目のところを受け持てみたい。

和田茂樹「漱石・子規 往復書簡集」(岩波文庫)

松山の子規記念博物館で手に入れた「漱石・子規 往復書簡集」(和田茂樹・岩波文庫)を降りに触れて詠む進めていたのだが、ようやく読み終わった。

1867年のまったく同年生まれの二人の偉人の、遠慮のない、そして互いに尊敬の念を抱きながらの22歳から子規が夭逝する35歳までの13年に及ぶ手紙のやりとりは、まことに木興味深い。

就職、友人、病気、仕事、そして、漱石の俳句に対する子規のコメントや評価などが克明に記されている。

この書簡集では、現存する手紙はすべて集めたようで、すべての番号がついている。それによると漱石は89、子規は53であった。

子規は病気が進行していくにつれて手紙を書くのが億劫になってくるからだろう。

漱石の俳句を丹念に読んでみると、この文豪は俳句に集中していたら、俳人としても名を成しただろう。諧謔の味があって、なかなかいい俳句が多い、

それに対して、子規のつけるコメントが遠慮が無くて面白い。「やもめの家独り宿かる夜寒かな」には、「人聞きのワルイ句也」とあり、「初心、平凡、イヤミ」「趣向も言葉もマヅイ」「巧ならんとして拙なり」、ひどいものになると「非俳句」というものまである。

子規の後継者である高浜虚子は漱石の俳句を「清新不凡ら漱石調ナルモノアリ敬服」と明治30年(1898年に語っている。

肝胆相照らした文豪と俳句革新者の友情の交歓はいい。

1899年、22歳のときに子規は子規と号し、漱石は漱石と初めて署名している。この漱石という名ももともとは子規の使っていた俳号の一つである。この年に2人そろって第一高等学校に入学し、寄席を通じて友だちになった。

23歳そろって帝国大学に入学。松山に帰った子規の一高の卒業証書を漱石がみずかっている。

漱石「僕毎年の夏休みにハ非常の大望を抱く故いつでの日が足らずして十分の一も出来たためしなし。」

24歳には論争。

漱石「小生元来大兄を以て吾が朋友中一見識を有し、自己の定見に由って人生の航路に舵をとるものと信じ居をり候。その信じきりたる朋友が、、」

25歳。

漱石「かかる事(悪口)を気にしては一日も教師は務まらぬ訳と打捨をき候。その後講義の切れ目にて時間の鳴らぬ前無断に室外に飛び出候生徒ありし故、次の時間に大に譴責致候。、、、」

26 歳。

漱石、帝大卒業。帝大大学院に入学。東京高等師範英語講師に就任。

子規、帝大を中退。

28 歳。

漱石、松山中学の英語教師として赴任。年末に漱石は見合いをして中根鏡子と婚約。

雛に似た賦府もあらん初桜

裏返す縞のズボンや春暮るる

屑買に此髭売らん大晦日

親展の丈燃え上がる火鉢哉

なき母の湯たんぼやさめて十二年

「悪いのは遠慮なく評し給へ。その代わりいいのは少しほめ給へ。」

29 歳。

漱石、虚子、森鷗外と初めて会う。

漱石は松山中学校を辞し熊本の第五高等学校講師に就任。漱石、結婚。

漱石「しかしながら習慣をかくと退歩の憂あり。故に送る」

三日雨四日梅咲く日誌かな

舟軽し水皺よって葦の角

衣替へて京より嫁を貰ひけり

反橋の小さく見ゆる芙蓉哉

日の入や五重の塔に残る秋

君が名や硯に書いては洗ひ消す

こがらしや海に夕日を吹き落す

僧俗の差し向かひたる火桶哉

30 歳。

漱石

「われ一転せば猿たらん、われ一転せば神たらん、、、背後に印する鞭の痕は一条ごとに秒と分と時と昼夜を刻して自覚の料となす、、、漱石子遂に猿に退化せんか将は神に昇進せんか。そもそもまた元の木阿弥か、、、」

元日や吾新たなる願あり

堇程小さき人に生まれたしよ

漱石「実は教師は近頃厭になりをり候へども、、、」「教師をやめて単に文学的の生活を送り淹たきなり。換言すれば文学三昧にて消光したきなり。、、」

行く春を剃り落としたる眉青し

水涸れて城将降る雪の峰

子規「生きてゐる間は一日でも樂はしたく贅沢を尽し申候。、、回復の望なくして苦痛をうくるほど世に苦しきのは無之候。

子規「余命いくばくかある夜短し」

31 歳。

漱石

温泉や水滑たに去年の垢

憂あり新酒の酔に托すべく

32 歳。宇佐、耶馬溪を漱石が旅行し、俳句を詠む。

玉蘭と大雅と語る梅の花

子規「家庭の快樂多き者は音信稀なりといふ原則は、、、」

漱石

堅き梨にに武器刃物を添えてけり

朝寒の顔を揃へし机かな

子規「左に手に原稿用紙を取りて、物書くには原稿用紙の方を動かして行く、不都合な事、苦しい事、時間を要する事、、」

33 歳。

6 月漱石、文部省から 2 年間のイギリス留学を命ぜられる。

7 月、漱石熊本を引き払い上京。

8 月、漱石、寅彦を多もない子規を訪問、最後の会見となった。

子規「人に見せては困ル、二度読マレテハ困ル。、、、コレホド僕の愚痴ニシテ病気ダヨ。、、君に対して書面上に愚痴をこぼすのハこれ限りとしたいと思ふてゐる。、、、決して人に見せてくれ玉ふな。、、」

34 歳。

漱石イギリスより「妄りに過去に執着する勿れ、徒に将来に望を属する勿れ、満身の力をこめて現在に働けというのが乃公の主義なのである、、」

35 歳。

9 月子規永眠。

漱石

筒袖や秋の枢にしたがはず

手向くべき線香もなく暮れの秋

鷺田清一・内田樹「大人のいない国」(文藝春秋)

以下、内田樹の発言から。

- ・ これほど幼稚なのに、致命的な破たんもなく動いている日本社会。
- ・ 成熟した人間のロールモデルがない。
- ・ 折り合いをつけることの大切さ。
- ・ 教養:うさんくさいものと何かすごそうなものを見分ける能力。本物と偽物。知についての知。鳥瞰できること。
- ・ ネット上の貶下的言説は「呪」である。祝福だけが呪詛を相殺できる。

林真理子「野心のすすめ」(講談社)

31 歳直木賞。36 歳結婚。41 歳柴田錬三郎賞。44 歳出産。以下、ピックアップした言葉。

- ・ 自分でちゃんと努力をして、野心と努力が上手く回ってくると、運という大きな輪がガラガラと回り始めるのです。
- ・ いまも、小説は一作一作、いつも新しい挑戦をしています。
- ・ 新規まき直し。思い切って「河岸を変えてみる」。
- ・ 人間が成長するのは、何ととっても仕事だと思ふんです。、他人と折り合いをつけながら自己主張していくことでもある。、。
- ・ 同じようなものは二度と書かない、一度評価が下されたテーマには再び乗っかからないようにするのが私の矜持でもあり、自負でもあるんです。

河村幹夫「人生は 65 歳からがおもしろい」(海竜社)

昨日河村先生からいただいた新著を読了。9 月 26 日発刊。

ビジネスマン時代から「三菱商事取締役・シャーロック・ホームズ研究者としての著作で日本エッセイスト賞を受賞・先物取引の研究者として 58 歳で多摩大学教授に転身」という見事なスタイルにあこがれていた。河村先生は私のビジネスマン時代のロールモデルだった。

河村先生のエッセイは若いころから全部読んできた。先生の本はすべてご自身の経験から生み出された生き方の知恵の披露になっていて、ずいぶんと参考にしてもらった。

「この小著はビジネス世界での現役を無事卒業した諸氏、および近く卒業予定のシ

ニア諸氏に捧げるものです。」とあるように、77 歳になり喜寿を迎えた著者が、65 歳前後の人生の後輩に宛てたアドバイス集だ。

名うてのエッセイストらしく、軽いユーモアと謙虚な姿勢で淡々と所信を述べているので、穏やかな気持ちで読み進むことができる。

- ・ 「ワトソン君、君は物事を見るが観察をしない」(シャーロック・ホームズ)
- ・ 「シニアに必要なのは教養と教育。今日用がある。今日行くところがある」
- ・ ウオーキング。
- ・ シニアの人生設計は借金無しからスタートせよ。
- ・ (知識・情報＋経験)X思考＝智恵
- ・ 自分で旗を掲げよ
- ・ インフレの予防の時間はあるから、専守防衛を心掛けよ
- ・ シニアの人間関係は、「君子の交わりは淡きこと水の如し」で
- ・ 古本回収サービス
- ・ 古希い生前葬を挙げる。本当の葬儀は家庭葬。
- ・ 「あなたはこれまでの人生のいかなる時期よりも、もっと忙しくなることでしょう。なぜなら今やあなたは引退され、察するに、自分のやりたいことにこの世のすべての時間を注ぎ込むだろうからであります。」(フリードマン教授)

半藤一利「日本型リーダーはなぜ失敗するのか」(文藝春秋)

最後の「あとがき」の最後に、「げに人のリーダーたるは難きかな、人に信頼の念を抱かせる人格形成は難きかな、なのである。」と述べている。

日本の軍隊はリーダー像をどのようにとらえていたのかという歴史は参考になる。要するに威厳と仁徳などの人格論に終始していた。

しかし日本の軍隊はリーダーを補佐する参謀を重視し、陸大や海大は軍事オタク養成機関に過ぎなかったと喝破している。その参謀がやがてトップになっていくというしくみである。

海軍大学校では「戦略・戦術・戦務・戦史・統帥権・統帥論」が 72.8%。「国際情勢・経理・法学・国際法」といった軍政の授業は 13.2%、「語学・日本史」などの一般教養は 14%しかなかった。人格教育などはできていなかったらしい。それが太平洋戦争の敗戦につながっているという見立てだ。

リーダーに必要な世界観の醸成と人物としての修養に失敗したということだろうか。

戦国時代の大名は中国の兵法書の武経七書を学んだ。

- ・ 「孫子の兵法」:将の将たる人間は、智・信・仁・勇・嚴をしっかりと持て。
- ・ 「六とう」:将には五才十過あり。五才とは「勇・智・仁・信・忠」

帝国陸海はクラゼヴィッツの「戦争論」を学んだ。七つ:「勇気」「理性」「沈着」「意志」「忍耐力」「感情」強い性格

西南戦争で「参謀が大事だ」という考え方が成立。総大将は戦いにうとくてもいい。有栖川宮総督と山県有朋参謀長。

参謀養成のために陸軍大学校と海軍大学校が創設された。大将の理想は陸軍の大山巖、海軍の東郷平八郎。

- ・ 陸軍「統帥綱領」:「高邁な品性」「高名な資質」「無限の包容力」「堅確な意志」「卓越した識見」「非凡な洞察力」
- ・ 「海軍次室士官心得」:(尉官である下級指揮官)

日本型リーダーシップとは、。。。

- ・ 陸軍の「軍人勅諭」: 守るべき五つの徳目「忠節・礼儀・武勇・信義・質素」
- ・ 海軍の「五省」: 「至誠・言行・気力・努力・不精」

サムライ精神、日本人のうるわしい品性、それこそが日本型リーダーシップといえるものかもしれない。

2013年10月

内田樹「修業論」(光文社)

著者が40年の稽古を通して得た修業の本質を語った本だが、武道の経験のない者にはなかなかつかみがあるところがある。

著者は、武道の修業で開発される能力は「生き延びる力」であり、敵を倒すことが目的ではなく、自分自身の弱さのもたらす災いを最小化し、他者と共生・同化する技術を見がく訓練の体系である、という。道場の稽古は「楽屋」で、生業の場が「舞台」となる。守るべき私を廃棄すると、修業は私を予想もしなかった場所に導いていく。

最後の司馬遼太郎論が斬新だ。桂小五郎、武市半平太、坂本龍馬がそれぞれ幕末の三大剣道場の塾頭をそろってやっていたのは司馬のいうような偶然ではなく、剣技の高さと志士としての器量のあいだに相関があったと著者は見る。彼らは「どうふるまってもよいかかわからないときに、どうふるまえばいいかがわかる」能力を修業によって身につけていた。

著者がいのように何度も読みかえすべき「するめ」のような本のようなのだ。

とりあえず気になったところを、以下ピックアップ。

- ・ 修業というのは、エクササイズを開始時点で採用された度量衡では計測できな

い種類の能力が身につく、という力動的なプロセスです。

- ・ 戦闘能力と統治能力を共約する人間的能力が存在する。それは「集団をひとつにまとめる力」である。
- ・ 「人の技を批判してもうまくなならないからだ」
- ・ 瞑想
 - ・ 1. 額縁を見落としたものは世界のすべてを見落とす可能性がある。
 - ・ 2. 先人が工夫したあらゆる心身の技法は生きる知恵と力を高めるためのものである。
 - ・ 3. 私たちが適切に生きようと望むなら、そのつど世界認識に最適な額縁を選択することができなければならない。
 - ・ 瞑想のもたらすもっとも重要な達成は「他者との同期」である。
 - ・ 武道修行の目的は、想定外の事態の出来に遭遇したときに適切な対応ができることである。、、、何をなすべきなのか。「瞑想する」というのが、この問いに対する技術的な回答である。
 - ・ 「今・ここ・私」が遭遇した事態を俯瞰的に観察し、何が起きているのかを理解し、なすべきことがあれば、なすべきことをなす。それが武道的な意味での瞑想である。
 - ・ 二人の人間が対峙してるとき、その事態を「頭が二つ、体幹が二つ、手が四本、足が四本」のキマイラ的な生物が「ひとり」いる、というふうにとらえる。
 - ・ 生命活動の中心にあるのは自我ではない。生きる力である。それ以外にない。
- ・ 世に「神秘的」と呼ばれる経験の多くは「精度の低い計測機器では感知できなかった量的変化」である。
- ・ 成熟を果たした人間にしか、「成熟する」ということの意味はわからない。

「覚悟の磨き方 超訳・吉田松陰」(サンクチュアリブックス)

「志」の章から。

- ・ 人類が誕生して以来、一つのことに本気で取り組んでいる人の姿を見て、心を動かさなかった人はいません。
- ・ その狂気を持っている人は、幸せだと思うんです。
- ・ どんな仕事でもいいのです。ただその仕事だけは、なにが起きても責任を持つ。絶対に逃げない。面倒に巻き込まれても、笑って「これが自分の仕事だから」心の底からそう言えたまさにそのときから、命が宿るのです。
- ・ 行き詰ったときに、「面白い」と思えるかどうかによって、そのあとが決まってくるのです。
- ・ 本物になるまで 20 年。ただ愚直に動いていればいい。

江波戸哲夫「団塊世代の二万二千日」(リベラルタイム出版社)

「団塊世代の二万二千日」(江波戸哲夫)を読了。

中根千枝「タテ社会の人間関係」(講談社現代新書)

中根千枝「タテ社会の人間関係」(講談社現代新書)を久しぶりに再読。

1966年以來 110万部突破の名著。「単一社会の理論」という副題がついている。

日本のリーダー像:

「部下に引きずられる」「ディクテーションが発揮できない」「権限が小さい」「代表者」「相対的な力関係によってリーダーのあり方が決まる」「人間に対する理解力・包容力が資格」「部下に自由を与える」「直属幹部の統率が鍵」「能力よりも人格」「組織は人なり」。

寺島実郎「時代を見つめる目」(潮出版社)

総合雑誌「潮」に2000年から2013年までに寄稿した論考や識者との対談を1冊にまとめたもの。

第一部「9・11以後のアメリカと日本」。対談:山内昌之。舟橋洋一。中西寛。

第二部「中国の台頭と日本の現実」。対談:山崎正和。

第三部「問われる日本の経済政策」。対談:水野和夫。

第四部「日本外交の進むべき道」。対談:野村彰男。藤原帰一。

第五部「3・11と日本のエネルギー戦略」

エプログ:「岐路に立つ日本の民主主義」。対談:姜尚中。

この書の内容はもう一昔前の内容も多いのだが、後追い敵に加筆・改稿はしていない。

- ・ 「発言の本質は、現在と何も変わってはいないからだ。むしろ、今起きている情勢を先んじて論じていたともいえ、」。
- ・ 「発言者というのは、無責任であってはならない。いま目の前で起きている事象を、その時代性や歴史性を検証しながら、本質を射抜いて発信する責任がある。」
- ・ 「私の発言が、情勢の変化に応じて推移してきたのか、それとも首尾一貫して変わらなかったのかを、本書を通じて感じていただけたら。そこから、責任ある発言とはどんなものなのか、一つの座標軸を持っていただけたのではないかと

期待している」

「はじめに」の中で以上のように述べているが、ここには変わることのない問題意識と一貫した主張を行ってきた寺島の矜持と自負がみえる。イラク戦争の時に、大義なき戦争だと反対した寺島に対して、アメリカにはついていくしかないとして賛成した論客がいかに多かったか、を思いだす。

「歴史と地理」を踏まえて事象の本質を見抜き、解決策を模索し、提言する。その主張が、時間がたつにつれて、証明される。こういう世界認識と時代を見通す目を持った論客は稀有である。

「政治改革」「マネーゲーム批判」「日米関係の再構築」「日米関係は米中関係である」「日米中トライアングル時代」「世界有数の技術を持った産業国家」「エネルギーのベストミックス論」「孤立する日本」が寺島の変わらぬ主張のキーワードだ。

「あとがき」では、「寺島文庫」という実験を書いている。

高齢者の社会参画のためのベースキャンプにしたいとのことである。私生活主義と拝金主義に染まった団塊世代のミーイズムから、社会や時代に対する責任をもって「参画」する意識改革を行おうとしている。「この世代は、結束もせず、連帯もせず、ただ茫漠とさまよっているだけだ」という説に納得する。

「私は「あるべき時代」をつくるために、参画することをもって「是」としてきた。そして自分だけでなく、私の周りにいる仲間や友人たちが、その問題意識を共有しながら、時代を変えていく力になることを夢想しているのだ。」

私もこの流れに参画をしていくつもりだ。

百田尚樹「リング」(PHP研究所)

ファイティング原田を軸とした戦後日本のプロボクシングの歴史をたどった物語。

百田尚樹らしい映像的な描写の筆力で一気に読ませる。

世界チャンピオン・ポーンキングピッチからタイトルを奪った試合は 1962 年。テレビで観た記憶がある。

ピストン堀口、白井義男、郡司信夫、ペレス、笹崎たけし、斎藤清作(たこ八郎)、海老原博幸、矢尾板貞雄、米倉健志、関光徳、エデル・ジョフレ、ジョー・メデル、柴田国明、西条正三、、、など思い出の名選手が次々と登場する圧巻の絵巻だ。

ファイティング原田の語録。

- ・ 俺は素質のある方じゃなかった。だから人の二倍三倍やらないとダメだったんだ。
- ・ 俺ほど練習した者はいないと思うよ。それに練習が好きだったからね。
- ・ 努力はかならず報われる。練習は裏切らない。そのことを証明するためにも、何

が何でも勝ちたかった。

- ・ 他のことはいつでもできる。でも、ボクシングは今しかできない。それに世界チャンピオンとリングで戦える人生なんて、他に比べることができないじゃないか。

モハメド・アリ

- ・ 死に物狂いの練習に耐えぬいてきた者こそが、厳しい互角の勝負において、心の底まで降りて行って、勝利に必要な1オンスの勇気を持ってくることができる。

1943年生まれの原田は1960年にプロデビューし、フライ級、バンタム級の世界チャンピオンになり、フェザー級の世界タイトルマッチで誤審により敗戦となる。11階級しかない時代に二階級を制覇、疑惑の判定がなければ三階級制覇であった。

原田は1970年に26歳9月で引退。矢尾板とのエキシビジョンマッチが終わり、リング上の原田にテン・カウントが鳴らされて会場は静まり返った。

原田は日本の1960年代を駆け抜けた天才だった。

解説者となり、翌年ファイティング原田ボクシングジムを開設。29歳で結婚。

1938年には日本人ボクサーとして初で唯一のアメリカボウリング殿堂入り。

45歳、日本プロボクシング協会会長となり2010年5月まで7期21年その座にあった。

西口啓「統計学が最強の学問である」(ダイヤモンド社)

ざっと読み終わったが、わからないところは、同僚の先生達に教えてもらうこととしよう。

「統計学によって得られる最善の道を使えば、お金を儲けることも、自分の知性を磨くことも、健康になることもずいぶん楽になるだろう。だがそれはあくまでも副産物である。統計リテラシーによって手に入る最も大きな価値は、自分の人生を自分がいつでも最善にコントロールできるという幸福な実感なのだ。」

ニュートンの言葉が紹介されていた。

「私が遠くを見ることができているのだとすれば、それは巨人の肩に立っていたからです」

平野啓一郎「私とは何か―「個人」から「分人」へ」(講談社現代新書)

この本の主張は、人間の単位を考え直すことだ。

個人という意味で使っている individual は、これ以上分けられないという意味である

が、本当にそうか。そして本当の自分なるものがあるという考え方が間違いのもとではないか、というのがこの本の問題意識である。

平野は、人間は分けることが可能な存在であり、人間は対人関係ごとに複数の顔を持っており、一人の人間は複数の分人のネットワークによって成り立っているという。そして個性とは、その複数の分人の構成比率によって決定されるというのだ。

誰とどうつきあっているかで、分人の構成比率は変化する。その総体が個性となる。

自己の変化とは、分人の構成比率を変えるしかない。それはつきあう人間を変えることだ。

自分という人間は、複数の分人の同時進行のプロジェクトと考えよう。

自分探しの旅とは、欠落している新しい分人を手に入れて、新たな個性を創出しようとする行為だ。

私たちは、複数の分人を生きているからこそ、精神のバランスを保っている。

自分が気に入る分人を少しずつ増やしていくことができれば、自分に肯定的になっていける。

片思いとは、お互いの分人の構成比率が、非対称な状態である。それが許せずに自分向けの分人を大きくしようと、異常な行動にでるのがストーカーだ。

分人主義は、人間をここに分断させず、単位を小さくすることによって、きめ細かなつながりを発見させる思想である。

帰属するコミュニティが一つであることがアイデンティティであったが、今後重要なのは複数の分人を使って複数のコミュニティに参加することだ。むしろ矛盾する複数のコミュニティに参加することが大事なのだ。

個人を複数の分人のネットワークとしてとらえると新しい視界が開けてくる気もする。

分けるというより複数のレイヤー(層)によって重層的に個人が形成されていると考えることもできる。

ヨコに分けられているのではなく、タテにつながっているのではないか。

百田尚樹「永遠のゼロ」(講談社文庫)

これがデビュー作とはすごい。

2013年11月

青木美智男「小林一茶一時代を詠んだ俳諧師」(岩波書店)

江戸後期の俳諧師・小林一茶(1763-1827年)は、30代の初めから晩年に至るまで、その日の晴雨と出来事を記した日記をつけ、詠んだ俳句を克明に記した稀有な俳諧

師だった。そして毎月、その月に詠んだ句からこれはという句を書きとめた。晴れと雨の日数、在庵と他家の回数、詠んだ句数を記録した。この習慣は 39 歳から 63 歳まで 22 年間に及んだ。

一茶は生涯でわかっているだけで 2 万 1200 の句を詠んだ。50 年の生涯だった芭蕉は 967 句、67 年の蕪村は 2918 句だから、驚くべき多作だった。

一茶は芭蕉の確立した蕉風と一線を画し、粗野な人間を意味する荒凡夫として夷(ひな)の俳諧に徹した。

信濃国で生まれた一茶は継母とうまくなじめず、15 歳で江戸に奉公に出る。

貧乏暮らしの中で、25 歳あたりから俳諧師として生きていく決意をする。一茶を名乗るのは 29 歳。30 歳で、四国・西国への 6 年に及ぶ旅に出る。こういった旅は、各地の宗匠との繋がりを持つことになり、俳諧の宗匠として認められるには必須の条件だった。

39 歳、父から財産分割の遺言状を与えられる。

41 歳でようやく江戸で俳諧師として認められる。各地の俳諧師と句会を持ちながら、日本の古典や漢籍の学習を進め、当時の話題の書物も読むなど読書の範囲は広がった。

40 代後半には、「正風俳諧名家角力組」という番付では上段東前頭 5 枚目に紹介されている。

もの凄い読書家であり、晩年の 61 歳から古典の抄録を開始し、克明に書写を行った。読書傾向からみると、日本優越論につながる国学に傾倒していたようだ。

一茶が生きたのは文化文政期であり、養蚕業や製糸業などの産業の勃興とそれに伴う貧富の差の拡大の時代であった。また、アイヌの和人化政策、そしてロシアの接近など内外をめぐる社会情勢も緊迫していた。そういった時代の中で一茶は社会性をもった句を詠んでいる。

一茶の句作は、59 歳と 60 歳が句作数のピークであった。

遺産相続を勝ち取った一茶は 50 歳で故郷に戻る。

52 歳で 28 歳年下の菊女と結婚する。

61 歳の時、菊女が死亡。

62 歳、38 歳の雪と再婚するがすぐに離婚。

64 歳、32 歳のやをと三度目の結婚。

65 歳で死去。

松かげに寝てくふ六十余州哉
芭蕉の脛をかじって夕涼み
もたいなや昼寝して聞田植うへ唄
穀つぶし桜の下にくらしけり

名月を取てくれろと泣く子哉
腹上で字習ふ夜寒哉
秋の風乞食は我を見くらぶる
山寺や木がらしの上に寝るがごと
君が世や茂りの下の耶蘇仏
世の中をゆり直すらん日の始
とく暮れよことしのやうな悪どしは
芭蕉忌やえぞにもこんな松の月
えた町も夜はうつくしき砧哉
花の世や出家士(さむらい)諸あき人
僧正が野糞遊ばす日傘哉
大名は濡れて通るを炬燵哉
なの花のとっばづれ也ふじの山
雪の日や古郷人もぶしらひ
目出度さもちう位もおらが春
這え笑へ二つになるぞけさからは
はつ雪に一の宝の尿瓶哉
ぽっくりと死が上手な仏哉
花の影寝まじ未来が恐しき

今日出海「私の人物案内」(中公文庫)

浦和高校から東大仏文科卒。鎌倉に住んだ。

明治大学教授、文芸協会書記長、文部省社会教育局文化課長、直木賞、文化庁長官、国際交流基金初代理事長、国立劇場会長、、、。小林秀雄の葬儀委員長。自身の葬儀委員長は永井龍男。

「自分のいない、自分の通夜なんて変なものだな」。

文化関係の著名人の姿がよくわかる楽しい本。

宮田律「イスラムの人はなぜ日本を尊敬するのか」(新潮新書)

日本人の倫理道徳の高さ、至誠という武士道の伝統、マナーの良さをアラブ人が評価。

山内太地「大学のウソ 偏差値 60 以上の大学はいらない」(角川書店)

山内太地「大学のウソ 偏差値 60 以上の大学はいらない」(角川 ONE テーマ21)を読了。

山内さんは 47 都道府県、14 カ国・3 地域の 880 大学の 1170 キャンパスを実際に訪問し、日本国内の 4 年生大学 783 校をすべて見ているという人物。そのエネルギーである志は「理想の大学の探求」だ。だから話が熱く、かつ具体的で説得力がある。

日本のトップ層といわれる大学は、まともな教育をしていない。このような教育ではグローバル競争には勝てない。

以上の問題意識を土台に、具体的な提言がされている。世界は富国強兵の競争。現代の強兵は、グローバル人材。多国籍企業で勝ち残れる人材。

- ・ 日本のトップ層の学力の高校生は海外名門大学に行くべきだ。エリート受験生は米国トップ大学を選択肢に入れろ
- ・ 彼らが抜けた分は中間層が日本の名門大学にいけばいい。そしてフィリピン英語留学でグローバル化に対応せよ。
- ・ 中堅大学は、教育機関としてはそろそろ完成に向かっている。
- ・ 学生寮。ライティングセンター。サバティカルクォータ。
- ・ フィリピン(学費は年間 35 万、寮費月 2.2 万。食費月 4 万。TOEIC500-600 が欲しい)。日本から 4 時間。
- ・ アジア留学を考えよ。シンガポール。マレーシア。インドネシア。中国海南島。

山内さんの主張は、偏差値の高い受験生を集める日本のマンモス私立大学は、完成に向かっている中堅大学の教育ノウハウを学べということになる。

偏差値の高いトップ大学とマンモス私学を断罪した書。参考になった。

2013 年 12 月

「司馬遼太郎の「遺言」—司馬遼太郎さんと私」(夕刊フジ)

作家、宗教者、女将、学者、同級生、編集者、新聞記者、など司馬遼太郎と縁のあった人たちの司馬遼太郎の追悼インタビュー集。

司馬遼太郎の人柄、志、エピソードなどがわかるいい本。

白鬼(司馬)と黒鬼(清張)の対決の話。半藤一利、寺内大吉、藤本義一、井上ひさし、梅棹忠夫、太田治子、ドナルド・キーン、丸谷才一、永井路子、宮城谷昌光、などが語る司馬遼太郎の生身の姿がよくわかった。

「義理堅い」「筆マメ」「思想家」「語り部」「22 歳の自分の青春に書き贈るための仕事」

「職人、アルチザンが明治の精神」「漱石の文章がいちばんいい」「気配りの人」「産経新聞の文化部長」「自分が小説だと思って書けば、何を書いてもいい」「職人精神を大事にされた」「理想の男をみてきた」「司馬史観は人間賛歌」「イデオロギーフリー」「司馬遼太郎の志を継がんらん」「黄色い花が好き」「陸羯南の研究」「人間にとって、人間ほど刺激的なものはない」「書いているうちにうもうなる」「やさしい人で折れる」「山片蟠桃賞」「蒙古放浪の歌」「作品もよく、人格もすぐれている作家」「この人は漱石だ、人を導くというところがある」「小説家は孤独だ」「現場は事後確認」「恵まれないなかで、私心がなく純粋に仕事をしている人を大変愛していた」「20 世紀前半が夏目漱石、後半が司馬遼太郎」「一個の精神」「男のスゴサ、アワレサ、コッケイサを書きたい」「燃えよ剣と空海の風景が好き」「励ましてくれた」「生まれ変わったらやはり新聞記者」「年を経るごとに、無私の人になった」「腹部大動脈りゅう破裂」「近代主義者」「室町以降」「鎌倉から始まる」「勉強しなさい」、、、、。

今から読むべき本。「故郷忘じがたく候」「ペルシャの幻術師」「梟の城」「司馬遼太郎論ノート」(丸谷オ一)

インフルエンザの予防注射

南アフリカのマンデラ大統領と弱小チームのラグビーワールドカップ優勝を描いた「インビクタス」。

27 年の投獄生活。赦し。寛容。人間資源の活用。人間マンデラ。リーダーのあり方。

日下公人「日下公人が読む 2014 年～ 日本と世界はこうなる」(ワック)

12 月 5 日発行。

以下、要旨。

来年はグローバリズムからローカリズムへ世界が変わる。そのとき多くの国はアイデンティティ・クライシスに襲われる。アイデンティティのある大国は日本だから、世界は日本を学ぶようになる。来年はアイデンティティ・クライシスに起因する混乱と分解が多発する。

- ・ EU で生き残るのはドイツのみ。
- ・ アメリカは人種戦争。白人比率はあと数年で 5 割を切る。モンロー主義に戻っていく。<http://k-hisatune.hatenablog.com/entry/20131206>
- ・ 中国は言語圏別に分解。日本が屈すれば南シナ海は中国の要塞となる。
- ・ スパイ防止法、NSA、CIA。集団的安保。核武装、。
- ・ 数字ではなく文化・精神・思想・道徳が問題になる。ローカリズムが勝ちエスニティの時代になる。地方・民族・国の価値が主役になる。

相変わらず独特のキレのいい日下節は健在だ。

日下先生は多摩大で開学以来の教鞭をとられていた方だ。わたしは JAL 時代にインタビューをしたことがある。また理事として顧客満足学会で理事長の日下先生に仕えた形にもなる。

この本の中にある「情報は持っている人に集まってくる。」という言葉も至言だ。推薦の岡田英弘著作集第 2 巻「世界史とは何か」(藤原書店)も読みたい。

童門冬二「50 歳からの勉強法」(サンマーク出版)

著者は海軍航空隊から特攻隊に志願するが翌年に終戦。51 歳まで都庁勤めで激務をこなす。芥川賞候補。美濃部知事のスピーチライターを 12 年間。退職後の 56 歳でベストセラー「小説 上杉鷹山」を上梓、86 歳を超えた今でも最前線で活躍を続ける人だ。

この人の著作を読んでいるし、勤め人を終えたのちに、「組織と人間」というテーマで歴史小説に挑みベストセラーを書くという姿勢に共感を覚えていたので、この本を手にした。童門はデーモン(悪魔)からとった名前である。

どういう人生観と工夫を行っていたのだろうか。

- ・ 在職中から歴史雑誌(同人誌)を舞台に休日を使って習作活動。
- ・ 榎田思考、理論と実践、知識と行動、不易と流行、ゼネラリストとスペシャリスト、。。どちらかに偏らずに、どちらの視点や思考法も併せもつ。二者択二。
- ・ 同時進行。
- ・ 人生で大切なことはすべて映画から学んだ。小説を書く際の肥沃な肥料。
- ・ 「なら人間」を目指せ
- ・ 「自分を高く評価して、謙虚に生きたまえ」。主体性と協調性。
- ・ 仕事場は自分を磨く神聖な場所だ。
- ・ 平凡を重ねてついに非凡にいたる。
- ・ 歴史とは人間の生き方、死に方の集積。50 代からは歴史を学ぶのに向いている。
- ・ 山本周五郎の作品を読んで人間研鑽や人格修行に励む。情を学ぶ心の師匠。
- ・ 太宰治。人の喜びや感動に奉仕する精神。文学の師匠。
- ・ 一文のセンテンスは最長でも 40 字までを限度とせよ。(丹羽文雄)
- ・ 自分の手足を使って得た「なま情報」に勝るものはない。活字情報は「干物」。
- ・ 話法は落語から学んだ。6 代目三遊亭円生。3 分に一回は笑いをとる。
- ・ 「お前の敵はお前だ」(石川淳)
- ・ 「人の多くは死ぬべきときに死んでいく」
- ・ 「たとえ世界の終末が明日であろうとも、私は今日、リンゴの木を植える」(コンスタンチン・ゲオルギユ)

野田先生や私の母と同じ 1927 年生まれの 86 歳という高齢を迎えても、なお執筆と講演に命を燃焼している「起承転転」の人生観には大いに共感を覚える。

司馬遼太郎「播磨灘物語」(講談社)

司馬遼太郎「播磨灘物語」全四巻を読了。

秀吉の軍師黒田官兵衛の一生を描いた物語。黒田官兵衛如水は九州の役の後に、豊前の6郡12万2千石をもらう。京都、築城、中津、上毛、下毛、宇佐である。息子の長政が宇都宮一族を陰惨な形で謀殺したという伝承が残っている。

来年の大河ドラマの主人公なので、これで細部にわたり楽しめそうだ。

立花隆「自分史の書き方」(講談社)

同時代史の中の自分史。

エピソードの連鎖。

事件、イベント、と自分。

芦原すなお「青春デンドケデケデケ」(河出文庫)

四国・香川の観音寺の高校生たちのロックバンドと友情と恋の物語。高校 1 年生から 3 年生の 3 年間の 15 歳から 18 歳の期間が軽いタッチでユーモラスに描かれている小説。1990 年に発表されたが、翌年には直木賞をとっている。

この芦原すなおという作家は、私と同学年なので出てくる音楽や歌手や曲目などに懐かしい思いを持ちながら読んだ。

エレキの神「デンドケ」をもじったタイトルであるが、私には「テケテケテケ」と聞こえたが、本当は「デンドケデケ」なんだそうだ。

平凡パンチ、高校 3 年生、ダイハツ・ミゼット、パット・ブーン、プレスリー、ローリング・ストーンズ、ジャイアント馬場、ポール・マッカートニー、ロマンス、神戸一郎の銀座九丁目は水の上、ビートルズ、アダモ、ボブ・ディラン、三田明の美しい十代、西郷輝彦の星のフラメンコ、舟木一夫の学園広場、橋幸夫のチェ・チェ・チェ、タイガースのシサイド・バウンド、ブルーココメツツのブルーシャトー、、、、。

同級生たちのバンドメンバーもそれぞれの進路を取るのだが、主人公は東京の私大(早稲田大だろう)を受ける。

「これから先の人生で、どんなことがあるのか知らないけれど、いとしい歌の数々よ、どうぞぼくを守りたまえ！」という涙の出るような祈りで終わっている。

私自身はあのエレキギターブームとは縁遠かったが、あの時代の雰囲気はわかる。
この小説を 1992 年に映画化した大林宣彦は、「解説」で奇蹟のような青春小説だと思
い、映画の常識にとらわれない発想で、映画化に成功する。

北杜夫「どくどくマンボウ青春記」(新潮社)

来年は「青春記」を書こうとしている。

このため、芦原すなお「青春デンデケデケデケ」から始まって、北杜夫「どくどくマン
ボウ青春記」、そして井上ひさし「青葉繁れる」を読んでいる。

本日の「どくどくマンボウ青春記」は、再読である。

熱烈なマンボウファンであった時代に、航海記、昆虫記なども読んでいる。

この青春記は、北杜夫が40歳にならんとする時期の作品。

旧制松本高校から東北帝大医学部の間の時期の、ユーモアあふれる青春模様を
愉しんだ。

父の斎藤茂吉の素顔の部分が面白かった。

「おっかないやりきれない父であった茂吉は、だしぬけに尊敬するにたる歌人として
私の前に出現した。」

父の作歌の場面。「父はまだうずくまっていた。頭をかかえるようにして苦吟していた。
そうして、茂吉という歌人が全身をしぼるようにして考え込んでいるさまは、私にやるせ
ないような感銘を与えた。」

「父にはユーモア感覚というものが欠如している。そのくせ彼の言動、その文章に妙
に可笑しみを誘うものがあるのは、すべての事柄にあまりにひたぶるで、鶏を割くにもノ
コギリを用い、一匹のノミを捕えるにも獅子のごとく全力をふるうからである。」

敬愛するトーマス・マンについて。

「マンは一語一語言葉を厳密に選びだす作業を午前中だけつづけ、いかに感興が
のろうと、午になればこれを打ち切ってしまう。」「神聖な午前」

北は、ドストエフスキーを世界最大の作家と思い、漱石の三四郎も完璧な文章として
いる。太宰については若者に自分ひとりのために書いたような錯覚を与える術を持つ
ていると書いている。

北の独白。

- ・ どんな些細な考え方ひとつにせよ、一度自分の頭脳で濾過したものでなければ、
容易に信じる気になれない。
- ・ わかりきったようなことになお深い謎を見出せるのは選ばれた人たちだ。
- ・ 自殺するならとにかく三十歳まで生きてみる、ということだ。
- ・ 自己を高めてくれるものはあくまでも能動的な愛だけである。

井上ひさし「青葉繁れる」(文春文庫)

著者の精神的故郷である仙台で、少年時代に妄想ばかりしていた男の思想的半自叙伝を、すべての権威を相対化してしまうパロディ意識で描いた愉快的青春小説、と文庫の解説にある。その通りの青春小説。

ヒロインの若山ひろ子(第二女子高生)は、若き日の若尾文子だといわれている。

2007年の「新装版あとがきに代えて」には、この小説を書いた理由が記されていた。

敗戦後、日本には三種類の大人がいた。

- ・ 第一群「わたしたち大人はまちがっていた。そのまちがいを子どもたちの前で明らかにしながら、この国の未来を、彼らに託そう」
- ・ 第二群「わたしたちにまちがいがあるはずがない。、、しばらくひっそりと息をひそめて復権の機会を待とう」
- ・ 第三群「今日の食べ物はあるのか」

仙台の第一高等学校の先生たちはほとんどが第一群にあった人々だった。昭和20年代の後半から第二群の大人たちが「復古調」というお囃子にあわせて息を吹き返し、学校を子どもたちを管理する施設に仕立て直した。第一群の人たちが子どもたちを懸命に後押ししていた時代があったことを文字にのこしておきたくて、この小説を書いたとある。確かに先生たちの描き方には愛情がこもっている。

青春小説の不朽の名作、というだけではないということだ。